

あらず、神佛の能力劣等なるがためなりと思ひ、甚しきは其神佛に向つて嘲罵をなすものすらある。然して亦祈禱をなし經文を誦すれば、神佛は必ず之を聞入れるものと信じて居る。彼の神前に種々の供物をなし、又は護摩をたき經典をよむは、神佛をして我意に従はしめんとの術策であつて、經文を読めば天地を動かし、見えざる神佛をして其本來の意志を枉げて人意に従はしむるものと思ふのである。されば印度の如き處では、天地の間に最も偉大なるものは僧侶であると信じてをる。何となれば僧侶は其經文を読んで天地の神を自由自在に使役するからである。斯る見地よりすれば神は一個の傀儡に過ぎず、僧侶は神をして己が心のまゝに働かしむる一種の人形使ひの様なものである。之れは必ずしも印度ばかりでない。我國在來の宗教にもこの要素が多分を占めて居る。斯る不合理なる神觀があるであらうか。斯る觀念を以て基督教の宗教的信仰を評する、野蠻人が文明の諸器械を評すると一般である。我等は天地の正義公道に覺醒し人類永遠の大局に着目せねばならぬ。軍備の擴張夫れも必要であらう。實業の振興、夫れも必要であらう。乍併更に根本的にして更に大切なるは、國民全體

が倫理的に道義的に覺醒することである。日本人は世界人類に向つて何を貢獻すべきか。軍備を擴張する所以は如何なる目的のあつて存するか。そこに道義的なるものありや。そは却つて東洋に覇を稱し、以て世界に雄飛せんとする野心にはあらざるなきか。獨逸の大軍に對し、諸國が振ひ起つた所以は何であらうか。之は獨逸が徒らに軍備を擴大し國際的道義を無視して、歐洲を自家の獨舞臺とせんとの大ナポレオンの野心を逞くしたるが故に之れを膺懲せんとの意志に外ならない。

然るに我國民は茲に着眼せずして、獨逸の勇ましき武者振りを見て驚歎の叫びを發し、我も斯くの如くならざる可らずと獨逸を敵に回しながら彼を崇拜し、彼の後を倣はんとして、毫も道義的に覺醒しやうとしない。即ち目に見ゆる物質的能力に眩惑せられ、見えざる靈性の力、人間心靈の活動に覺醒するものは少ないのである。今は國民が外的に覺醒することをやめて、内的に靈的覺醒をなすべき秋である。日本が世界に對し、正義人道を布かんがために海軍を擴張するの必要があり、神の公道を擁護するために陸軍を増設するの急があるならば、吾人又何をか云はん。然るにそは決して

斯る高明正大なる理想實現のためではない。斯くては動ともすれば獨逸の二の舞を演ぜざるを得ないであらう慎まねばならぬ。されば吾人は切に我國民が公道正義に覺醒せんことを希望せざるを得ない。之れ即ち靈的に覺醒するの所以の道である。信仰に覺醒する第一歩である。今や國民は一種の懷疑思想に囚はれんとしつゝある。即ち正義公道何物を世は強者の手中にある。世界同胞、平和博愛等の思想は畢竟之れ弱者の聲である。武力さへあれば世界は我が意の如くなるべしと。之れ實に前途何等の希望なく光明なき懷疑思想である。然るに基督教に於ては此世界は神の宇宙經綸の最も尊貴なる表現にして、吾等人類は神の聖旨たる平等、博愛、正義、公道の思想に立脚して、世界同胞の實を擧げ得べきものと確信し、之れが實現に向つて努力しつゝあるのである。今日基督教程世界的勢力を發揮しつゝあるものはない。佛教は最早其發源地たる印度にはない、支那にもない、唯形骸のみを存してをる。佛教の稍活ける精神を存してをるものは我日本のみである。然るに日本の現代佛教に何程の世界的意識ありや。神道亦然りである。更に回教は如何之れも最早過去の形骸を存するのみである。

世界は最早回教を迎ふべく餘りに進歩してしまつた。今回の戦亂に斯教の總督が土耳其皇帝と共に回教の名を以て「聖戰」を全世界の回教徒に布告したるに、何等の反響なきは之を立證して餘りありと云ふべし。世界的勢力を以て駭々乎として人類の胸岸に波打ちつゝある基督教に向つて我國民が毫も注意を拂はず、殊に今回の戦亂以來、基督教も最早衰頹の外はあるまい、仁義を口にし博愛を力説した基督教の本家本元の歐洲諸國があつたからと、之を唾棄するは實に基督教の真相を見謬れるものにて、日本國民の一大損失である。

日本國民が懷疑思想に囚へられ物質主義に覺醒して、早晚頹廢すべきミタリズムを今更繰り返さんとしつゝある間に、歐米諸國に於ては捲土の勢を以て靈的一大覺醒をなし、基督教の理想こそ立國の根本策である。今日までは基督教を輕視し、基督の説く所以外の力に依つてをつたから、かゝる慘憺たる苦痛を嘗めた。今後は眞に基督教の理想を國家永遠の理想としてやらねばならぬてふ一大福音が傳播せられ、外なる力に依らずして人間の靈性に根ざせる偉力を發揮し、英佛獨露、協心戮力以て新天新地

の經營に努力するの時代が来るを疑はない。此の意味に於て吾人は今回の大戦亂を以て、歐洲文明に對する神の大審判なりしを信じて疑はぬ。我國民も此處に覺醒し來らねばならぬ。茲に覺醒し來るには先づ國民が其理性に於て物慾の上に超然たらねばならぬ。其良心を明かにして宇宙の本體たる神を見ねばならぬ。物を従とし靈を主とせねばならぬ。外なる物力を主とし内なる靈を従とする人には此の大勢を洞觀することは出来ない。明治維新以來の唯物主義物力萬能の思想を一掃し、精神主義、靈力主義に覺醒せねばならぬ。此根本的靈能に覺醒して宇宙の本體たる神に合する時は、凡ての觀察は正に轉倒し來るのである。茲に覺醒する國民には將來がある。神の恩恵があり擁護がある。神の意志に合する國民は永遠に滅亡するとは有り得ない。然るに茲に覺醒せずして、天地の公道を亂り宇宙の大法に逆行し、徒らに物質主義、武斷主義を謳歌し、以て自己の國家民族の盛大のみを期せんとするが如きは、之れ即ち天地の神に對して一大叛逆を企つるもの、其前途や智者を待たずして知るべきである。彼を取り之を捨つべきか、是を可とし彼を否とすべきか。國家の運命係りて此去就にありと思

ふ時吾等眞に戰慄せざるを得ない。我國民は宜しく明皎々の理性を照らし來つて之を燭臺に置き、人類進歩の眞相を看取せねばならぬ。

精神界の危機

予が基督教を信じて未だ多くの年月を経ざりし時、現代は第一世紀以後未曾有の大なる時代である、神の靈が大なる活動をなすこと、宗教改革時代よりも甚しく、第一世紀にも譲らない時代であると云ふ事を大尉ゼンスから聞かされた。予は斯教に就て未熟なりしたため其何の意たるやを了解するに苦しんだので、今世紀は左程までにえらい時代であらうかと思つたのである。然るに近頃に至つて青年時代に教へられたことを思ひ、此の事は間違でなかつた、眞にえらい時代に出會つたものであると痛切に感ずるに至つた。

古往今來、使徒パウロの如く舊約聖書を愛讀した人も少なからう。彼は若しクリスチャンとならなかつたならば、慥かに第一世紀に輝く一人のラビとして名を後世に止

めたに違ひない。彼は舊約を學び、舊約の精神に深く分け入つてをつた。其のパウロがクリスチャンとなるや、次の如く云つた。曰く「キリスト吾儕をして新約の使者となるに足らしむ。儀文に事ふるにあらず、靈に事ふるなり、そは儀文は死し、靈は生かせばなり。終に廢るべきモーセの面の榮によりてすらイスラエルの人々、彼の面をみとむる事能はざりき。斯く石に鑄りし儀文の死法なほ榮ある時は、況して靈の法は榮あらざらんや」云々と。彼は儀文に仕へずして靈に仕へた。モーセの律法は廢るべきものにして、之れに代る新なる神の天啓が授けられ、舊は廢り新しきものが勃發すると見た。之れ即ち現代の言葉を以て云へば宗教改革である。而して此の舊約の宗教即ち儀文の宗教より、基督の宗教たる靈能の宗教に革新せしことは、實に宗教史上に於ける一大改革にして未だ曾て斯くの如き革新はないのである。彼のルーテルの運動の如き實に大なる事業に相違ないが、之れを第一世紀に於ける宗教改革に比すれば其の内容に於て大なる相違があるのである。我國の識見ある僧侶が、日本の佛教に宗教改革なきは遺憾である。而して之れ實に佛教が基督教に及ばざる所以であらうと云つ

たが、至言である。世には親鸞日蓮を以てガルヅイン、ルーテルに比する人もあるが、淺見も亦甚だしきものである。之れは彼等が出でて、日本の政治、教育、風俗、社會の上に、其の出でざる以前と何程の變化を來したか、國民の理想が如何に向上發展したかと云ふことを見れば直ちに分る。親鸞の以前と其の出生以後と比すれば我國の政治上、風教上に何等の變化を見ない。其民族的理想の上に毫も之れまでなかつたものを加へない。新しい宗派は出來たが、社會は依然として變らないのである。之れに比すればルーテルの改革の如きは實にえらい。見よ泰西の文化は宗教改革を一轉機として變つてをるではないか。史家はルーテル以前を中古と稱し、暗黒時代と云ふのであるが、然り歐洲の文明は嚴然として茲に明暗の境を畫し、其の政治は茲に全く革新せられ、社會制度は根本的に改革せられた。個人の價值は高調せられ科學は起り教育は變り、從來の文化は全く面目を一新した。歐洲に於ける宗教改革は、實に非常なる影響を人文の上に與へたのである。然るに之れよりも大なるものが、否第一世紀の靈的革新にも譲らないものが現代に於て行はるゝと云ふ。吾人が其の何の意たるかを知る

に苦しんだのも無理はない。

ルーテルの宗教改革運動は寔に驚天動地の偉業にして、其主張する所には新しいものもないではないが、しかし其本來の意義より云へば之れは復古主義である。即ち宗教の權威が宗教大會の議決、羅馬法皇の意志に存するに至り、聖書と云ふものが敬して遠けらるゝに至つたので、ルーテルは之れを聖書に歸らしめたのである。換言すれば第一世紀に歸らしめたのである。新約時代に復古したのである。故に宗教改革は或る意味より云へば、復古主義の成功したるものである。然るにキリストの宗教改革は之れと大に其の趣を異にして居る。キリストは一個の豫言者ではない。彼は豫言の成就者、即ちメシヤである。キリストの事業は復古にあらずして眞の革新であつた。彼は古の豫言者を尊んだが、しかしイスラエル民族に向つて豫言者の昔に後戻りせよとは宣はなかつた。實に彼等の前に靈的宗教の大なる烽火を擧げて民族の理想を示し、自からそれが實現のために努力し給ふた。之れ彼等猶太人にとりては夢幻空想の如く感ぜらるるものであつたが、しかしイエスは之れが實現を信じ、身を挺して邁進し給ふ

たのである。而して彼は遂に十字架の死を遂げ給ふたのであるが、其理想は實現せられ、茲に過去の世界に見る能はざりし新天新地は現出したのである。之れ即ち新約の世界にして、ナザレのイエスの宗教改革が一種特別の意義である所以である。パウロは舊約の精神より、此のイエスの宗教意識に飛躍し、「儀文は死し、靈は生かす」と唱破したのである。然らば現代は如何なる時代であらう、現代の精神界は如何に革新すべきものであらうか。現代の世界は慥かに精神的維新を要すること切なるものがある。舊き精神は廢り、新しき或物が生れねばならぬ時機に際會しつゝある。試みに戦亂以前まで過去半世紀間に於ける思想界の状態を見るに、此五十年間程宗教に關する議論の盛なりし時代はない。聖書に就ける討究の囂しかりし時代はない。而して一面より云へば從來の權威たりし宗論は殆んど皆破壊せられ、多くの人々は信仰を失ひ、教會は衰頹を來した。乍併仔細に考ふれば、打破され廢棄されたるものは、必ずや聽がては自からにして廢るべき所のものであつて、夫れは聖書の中心思想でも基督教の根本眞髓でもない。眞の宗教的生命は依然として存してをる。新知識新研究の結果

は唯だ之れを掩ふへる殻皮を取り去つたのみで、將來發展すべき胚子は毫も傷けられずして残つてをる。夫れが非常なる力を以て生長し來ると云ふのが、進歩的基督教徒の主張であり、又信仰なのである。而して其の眞生命は今回の戦亂によりて急轉直下の勢を以て發展し來るは火を賭るよりも瞭かなることである。故に歐洲の識者は聯合側と云はず獨塊側と云はず、其國民をして如何にして此の戦後に於ける精神界の大潮流に順應せしむべきかと云ふことのために、互に心血を注いで考究を重ねつゝあるのである。

然るに我國民の狀態は如何、戦亂勃發後一年目の春の事である。我が國の各方面の代表的人物が、帝國大學山上御殿に會合して、戦後に於ける我國民教育の方針について懇談會を開いたことがある。其の席上一人の大學教授は歐米の基督教も今回の戦亂を以て滅亡したと云つて歐米精神界の破産を宣告したのであつた。大學教授にして然も平素宗教を研究する人にして斯くの如し。況んや一般民衆をや。しかし之れは實に皮相の見解である。此戦争を機として如何に基督教の眞面目が發揮せられつゝあるか

如何に斯教の本來の生命が芽を萌きつゝあるか。從來の社會狀態の爲に掩はれてをつた精神的機運が今回の戦亂を機として表はれ來りつゝあるか。少しく心をこめて歐米の精神界を見るものは何人も之れを看取することが出来るのである。試みに其一二を云はんか。先づ今や多くの教派が打破され了らんとする傾向がある。抑も此教派てふ語は百年や千年の歴史を有するものであつて、萬里の長城よりも堅固なるものである。夫れが今次の戦争によりて破れ初めた。今や世界の基督教は天主教、希臘教及プロテスタント教の三大別にならんとしつゝある。即ちプロテスタント教各派の墙壁は既に取り去られた。少くとも英國に於ては彼等は相提携して國民救済のために盡瘁しつゝある。今日露國の革命が眞に成功し、民主主義が徹底するに至らばロマノフ家に擁護せられ、其國教たる特種地位を有せし希臘教は、彼等民主主義者に信教の自由を與へ之と相提携せざれば夫れ自身の存在を危ふするに至るであらう。若し露國に於て信教の自由が保障せられんか、英米の宣教師は續々露國に赴くべく、必ずや彼國に於ける新舊兩教は親近するに至るであらう。而して露國に於ける兩教の接近提携が歐米の宗

教界に及ぼす影響や眞に大なるものであらう。天主教とプロテスタント教との接近は吾人未だ其の曙光を見ない。乍併大陸の塹壕に於ては、彼等天主教徒と新教徒とは起臥を共にし、生死を共にして居ることは間違ひない。彼等は教派の別を忘れ、互に相提携して祖國のために戈を取つてをる。彼等の間には恐らく教義信條の異同は忘れられ、キリストに於て一つとなり、其友愛心を發揮してをるに違ひない。宗派互に相反目し、信徒互に墻に闖ぐは斷じてキリストの精神ではない。然も教會の歴史は嚴然として其獨特性を語り、各派の一致融合を許さなかつたのであるが、之れは必らず今回の戦争を以て破るゝに至るは智者を俟たずして明かなることである。

又今回の戦争によりて基督教の形式や儀禮の上に大なる變化を來すかもしれないが其精神は愈々益々勃興して來るに違ひない。我國民は此の破壊を見て精神までも涙び行くものと見るのである。茲に我國識者の觀察を謬らしむる因がある。成程明治維新の當時、神社や寺院を打破した時、寺院殿堂の破壊と共に宗教はなくなつた。之れは即ち其宗教が靈なき形骸のみであつたからである。然れども彼等歐米の基督教徒には

宮殿よりも大なるものがある、活ける靈能がある。夫れは「ばさんとしても」ばすことは出來ない。彼等の宗教は其の精神の中にありて寺院會堂にあるのでない。故に形體は滅ぶるとも精神は依然として存するのである。故に戦亂の結果、基督教の形式の上には大なる打撃を受けんも、其精神は益々健全なる發展を遂げて、人類の間に横溢するに至るや明かなる事實である。予は日露戦争の當時トルストイの非戦主義には満足しなかつたのであるが、然も彼の議論には大なる尊敬を拂ふた。彼れは曰く「歐洲の基督教は四分五裂してをる。乍併何れの教派と雖も愛人の精神が其の根本義たるに於ては一である。基督教會の何處を突いても其の精神は漲つてをる。我は此精神の上に非戦論を立てる」と。此杜翁の識見は眞に偉大なりとせざるを得ない。之れ實に基督教の眞相である。而して彼れが曰ふ如く、此の精神は凡ての教派を貫通する所のものであつて、プロテスタント教であれ、天主教であれ、希臘教であれ、此の精神を拒むものはない。之れが今次の戦亂を機會として勃發し來るは疑ふべくもなきことである。

一兩日前入手したる英國の雜誌に、驚くべき記事があつた。夫れは國教會の監督會議に於て爾後詩篇中の復讐思想を歌へる章句を絶對に讀まざるを決議した事である。云ふまでもなく國教會に於ては詩篇を朗吟する。詩篇は古の詩人の深奥にして敬虔なる宗教的情緒の發露で、寔に妙じきものであるが、其の或物の中には彼等が祖國を思ふの切なるより、愛國の至情迸り敵愾心に燃えたるものがある。従つて一面より見れば慘酷非道と思はるゝまでに復讐の精神を發表してをる。是等の章句は何人も基督教的精神と扞格するものと見たのであるが、今日迄之れに對してさまで咎め立てを成さず、謂ふ所の敵を「惡」と見做して、惡魔に對する憤怒と解して見のがしてをつた。然るに監督會議は斯る個處には朱線を施し、公會の席に於ては絶對に讀まない事とした。愛の精神、正義の主張、神を讚美する個所のみをクリスチャンの讀むべき所として、人を憎み、憤恚の焰を燃やす個所を禁止するとは驚くべき出来事ではなからうか。此事を報じたる「デーリー、テレグラフ」は「復讐怨敵の心は東洋的（オリエンタル、パッシオン）感情である」と云つて居るが、之れはオリエンタルでも、オクシデンタルでもない。聖化せられざる

人間の根性である。洋の東西を問はず、舊き人間には皆此の醜陋なる心が存するではなからうか。夫れは兎も角、此忌むべき文字を取去つて、聖書を讀む事となせるは實に現代文明に於ける一大進歩でなくして何であらう。使徒パウロは「儀文は死し、靈は活かす」と喝破して、舊約の或部分は惜し氣なく之れを捨てた。既に廢つたものとして顧みなかつた。其の如く現代のクリスチャンは基督教の形體に拘泥せず、キリストの精神に直入して、其愛神愛人の大義の上に世界觀、人生觀を立てねばならぬ。基督教は着物ではない、身體である。小兒の時の着物は少年となれば着る事能はず、少年時代の着物は青年には用を爲さない。其の如く、所謂基督教の中に藏せられたる精神生命は生長發展して來る。従つて從來の殻皮は不用となり、新しき形體を要するのである。かくして復讐を歌へる文字が聖書の中から省かれたやうに、一切の舊思想は芟除せられ、新らしき思想、新しき信仰を以て世界人類の神を讚美すべき時代が來りつゝあるのである。

歐米のクリスチャンは斯る勢を以て勃興しつゝあるのであるが、翻つて我日本の精

神界は如何。我國に於ては戰亂勃發の當時此處彼處の神社にて戰勝の祈禱があつた。而して其祈禱の祭詞なるものを見れば唯「勝ちたい」と云ふ一念のみである。其中には正義人道の主張もなければ、萬國的精神の發現もない。唯だ「勝たせて下さい」と禱るのみである。英米にては戰勝の祈禱と云ふものがない。彼等は唯だ正義と人道の行はれんことを祈るのみである。故に戰爭の結果の如きは、唯だ神に一任し奉るのである。我國の「敵國降伏」とは其精神に於て雲泥の相違がある。「敵國降伏」の祈禱は今日の歐米にはない。之れは古の希臘、羅馬時代の遺風であつて、二千年前の思想である。然るに今日の日本には之れがある。之れ即ち自國あるを知りて他に國あるを知らざる侵略的思想である、復讐的根性である、利己的精神である。されば今次の大戦は諸列國が一致協同して世界の害惡を征服するてふ大義の戰爭なるに拘らず、日本は青島攻略の間のみ戰勝の祈禱をなし、青島が我が有に歸して後、尙二ヶ年、戰爭は愈よ酣にして勝敗の局は未知に屬するも、誰あつて祭祠をあげ戰勝を祈る者なく、當局者も亦之れを意としない。嗚呼何と狹隘なる精神であらうか。之れでどうして世界

の諸列強と伍して行くことが出来やうぞ。世界の大国は國運を賭して戦つてをる、然るに我國は僅かに青島戰爭の間のみ戰勝を祈り、後は恬として顧みない。實に憫むべき心事ではないか。之れ皆舊時代の觀念に囚はれたるが故であつて、陋劣なる復讐心排他心の結果に外ならない。換言すれば祖先崇拜的精神の結果に外ならない。見よ、我國人は如何に講談物を愛讀するか、今日尤も多く賣れ行くものは講談雜誌である。而して新聞紙の如き、讀者を繋ぐ所の唯一の綱は、社説にあらず、論文にあらず、又世界の大勢の報導にあらず、實に講談であると云ふ。講談は仇討にあらずれば御家騒動であつて、そこに現代的精神、世界的精神を見出すことは出来ない。之れがなければ新聞も雜誌も賣行がないと云ふに至つては、實に浩歎にたへないではないか。又識者の言論に徴するも、歐米の政治家と我國の夫れとを比すれば宵壤の差がある。彼等英米政治家の議論は、正々堂々として世界の視聽を惹くのであるが、我國の帝國議會の有様は如何。「我が海軍の地中海出動は何を報酬として之れを約束したのであるか」と叫んだ政黨すらある。其正義の念なく義侠の心なく、打算的、利己的、小商人的な

る、實に冷汗背を濕すではないか。之れを假令損害を蒙らうが、疲弊を來さうが、正義人道の擁護のため、世界人類の幸福のためには、國運を賭して戦はんと宣言する、英米の政治家に比して何たる相違であらうか。是等を見ても如何に日本の精神界が、世界に後れを取つてをるか分るではないか。

前にも述ぶる如く歐米に於ては驚くべき大精神が發揮せられつゝある。彼等は神を見つゝある、而して彼等が見る所の其神は、神學者が議論で積み上げた神でない。彼等の心に實驗しつゝある、正義、仁愛、犠牲、獻身の結果、獲得したる活ける神である。哲學者の所謂眞、善、美の極致なる絶對的理想でない。彼等が奮闘努力して實驗しつゝある人格的實在である。換言すれば十字架のキリストに依て表はされたる愛の神である。彼等は此の神の聖旨を成さんとして奮闘努力しつゝあるのである。然り歐米の識者は實に第二の新紀元を劃するために産みの苦しみをなしつゝあるのである。彼等が此精神界の維新のために苦心慘澹する努力は、今日の戦争に於て祖國のため奮闘する數萬の壯丁の夫れに勝ることも劣らない。かくてこそ新天新地の出現は望ま

る次第である。斯る世界の形勢に對し我國民が覺醒せざるに於ては、吾等は如何に世界の進運に後れを取るか分らない。彼等は聖書の中より復讐を除くに當り、我は尙ほ仇討報怨を主腦とする講談を耽讀し、彼等は世界人類同胞のために戦ふに際し、我は國家のみのために戦ふ。斯くして世界の同情を得んことは不可能のことと思はねばならぬ。

基督教は見えざる神、天地の間に比ぶべきものなき清き活ける神の實在を信する宗教である。此神は吾々を勵まし、懲らしめ、又鞭撻し、慰藉し給ふ。クリスチャンの信仰は僅かなる戦争の悲惨のために此尊き神を見失ふが如き淺薄なるものではない。然るを「今回の戦争を以て基督教も破産を告げた」と云ふが如きは、歐米識者の嘲笑を買ふ外更に得る所なき皮相淺薄なる觀察である。斯る深遠雄大なる精神を見出さずして、日本の固有思想を云爲し、日本には日本の神ありなど云ふ人は、神もなければ、宗教もなき、宗教の殻皮を抱ける哀れなる人々である。そこには神の國はない。現代人の憧憬する理想の社會はない。此基督教の主張する活ける神が個人の中に常住する

時は、其人は社會を動かし、國家の中にあれば其國家は世界を動かすのである。而して夫れが個人になれば其人は死者に等しく、又國家になれば其國家は世界に對して何物をも貢獻することは出来ない。切言すれば斯る國家は亡國に向つて歩を進めつつある國家である。世界的大革命のある傍らには國家の滅亡もある。世界の大覺醒に際し、世界的に覺めざる國民は大勢に置き去りにせらるゝ恐れがある。東洋指導の大任を有する日本國民は、果して大覺醒をなしつゝありや否や。日本國家は果して精神的危機より免れ得るや否や。之れ國民の猛省を要する點である。

國民精神の轉機

詩篇百十篇はイスラエル民族が、其の國王の即位式に際して歌つた所の意味深き歌である。吾儕千載の後、幾千里を離れたる極東に於て、往古極西に行はれたる此歌の意味を味ひ見れば、そこに不思議にも今日日本帝國に行はれたる此千古無比の即位大典と東西相應呼し、古今互に共鳴するものあるを覺ゆるのである。イスラエル民族に

於ける國王は、王たると同時に祭司であつた。即ち其政事は所謂祭政一致であつたのである。之れは日本の昔ながらの政事と良く似通ふた所のものである。我國の天皇は獨り王たり給ふのみならず、實に祭司として天津神を祭り、又皇祖皇宗を祭り給ふのである。故に天皇はイスラエルの王と同じく王たると同時に、祭司たるの天職を持たせ給ふのである。從て茲に又更に最も深遠なる點に於て共通せるものは、イスラエル民族の王は最も敬虔なる宗教的人物であつた。即ち天地を主宰する活ける神に對し最も敬虔なる奉仕をなす所の人で、云はゞ宗教的民族の理想であらねばならなかつたのである。我日本帝國に於ても亦斯の如し。即ち歴代の天皇は最も敬虔なる御方にして祭司となり萬民に代りて天神地祇に仕へ給はねばならなかつたのである。明治天皇の御製に「罪あらば我を咎めよ天津神民は此身の生みし子なれば」とあるが、之れ實に祭司としての理想をうたひ給ひしものと云ふべきである。イスラエルの民族は其の時代々の國王を何と云つて崇め尊んでをつたのであらうか。彼等は王を以て「神の子」又は「神の太子」と稱したのである。而して天の神は國王を祐けて國土を守護し給ふ

と確信した。「我汝の仇を汝の承足とするまでは我が右に座すべし」とは即ち彼等の確信であつたのである。

翻つて我民族を見るに日本民族にも昔から一種の信仰があつた。夫れば「我々の大君は天孫である神の子である。天祐は恒に我が皇室の上であり、歴代の天皇は此の天祐の下に皇運を伸長し給ふたのである」との確固たる信仰であつて之れはイスラエル民族の國王觀、國家觀と符節を合する所のものである。斯の如き敬虔なる民族の心事は今古の別なく東西の隔てなく、深く人心の秘奥に共鳴する所のものである。而して更に一つの共通點は其王土を守る軍隊であつて、國王は其の指揮者として大元帥として立ち給ふことである。當時のイスラエルに於ては軍隊は國王の指揮の下にあり、一には王を守り、又一には國土人民を守つたのである。「汝は朝の胎より出づる壯きもの露をもてり」の一句、實にいみじくも其の勇ましき兵士の劍戟が旭光に輝く有様を云ひ表はしてをるではないか。綺羅星の如き甲冑の美はしく駢べる壯なる有様を語つてをるではないか。我國に於ても之れと同じく天皇は同時に大元帥にましく、國家

の干城として忠誠勇敢なる兵士は幾十萬を算し、上皇帝を守り下萬民を擁護して平安の裡に業に就かしてをる。彼の年々歳々青山原頭に行はせらるゝ觀兵式の壯觀は、實に古の詩人が「汝は朝の胎より出づる壯きもの露をもてり」と歌ひたる光景を、さながらに現出するものではあるまいか。而して又イスラエル國民が「此國民は永へに榮えて亡ぶることなかるべし」との信仰は、之れ實に我等日本國民の心底に有する深き確信ではあるまいか。

吾等は斯かる幸福なる國柄に屬して居るのであるが、我日本帝國が維新以來斯く盛に發展し來りし處には果してどう云ふ原因があるであらうか。之れには決して見通すことの出来ない二つの大なる要素があると思ふ。其の一は即ち昔ながらの精神、換言すれば吾等の間に歌はれし忠孝の精神である。之れは我國民が大なる奮闘努力の結果贏ち得たる所の所謂國民道德である。今一つには世界的精神、即ち世界と共に全人類の福祉を増進せんとする所の精神其の物である。此の第二の精神は日本國民としては寧ろ極めて新しき所のものにして、維新以後に於て初めて其面目を發し來りしもの、

今日之れを國民道徳と稱するには尙早の歎なくんばあらず。實に日本國民が今後に於て一大奮闘を要する所のものである。吾等世界を大觀するに、一面實に悲しむべきものがある。見よ、世界の殆半を占むる大亞細亞の形勢は如何なる状態であるか。曾ては文明を以て世界に臨み、強國を以て世界を威壓せし國々は、今日如何なる状態にあるのであらうか。亞細亞全洲を見れば國と云ふ國は皆之れ治亂興亡の歴史を貽すのみにして、秋風落葉として山河空しく存するの觀ありではあるまいか。彼の印度を見ずや、曾ては其深遠幽玄なる文明を以て世界渴仰の的となつたのであるが、今や既に業に獨立の存在を失ひ國民は自ら治むる能はざるまでに成り了つた。而して西國の力によりて統治せられ、國民は氣息奄々として辛うじて餘命を保つてをるではないか。更に東して之れを見るも國らしき國はない。唯だ吾等の友邦たる支那共和國があるがしかし其の存在の危殆は今や豫言すべからざる状態にあると云はねばならぬ。我が朝鮮の如きは古來眞に獨立自治の實を發揮した事は殆んどなかつたのであつて、到底他國の政治的統治力に倚賴せねばならぬ國柄であつたのである。彼等が我國の政治の下

にあり、大日本國の一部として其大なる經營に參するは、寧ろ其處を得しものと云はねばならぬ。更に目を轉じて斯波を見よ。古は一大強國として四隣を威服した事もあつたが、今日は最早や其存在の理由を見出すに苦しむ有様となつてゐる。次は土耳其である。四百年以前は國富み兵強く屢々西方に遠征を試みて、全歐の人心を寒からしめたる土耳其は、今や將さに藥餌によつて露命を繋ぐ瀕死の病者である。之れが生殺は一に彼に投藥する者の匙加減にあると云はねばならぬ。實に土耳其は此の大戦亂が何れに片付くにせよ、其の獨立國としての存在を完ふする能はざるは、火を見るよりも瞭かなることである。斯くの如く亞細亞に於ける國と云ふ國は、過去百年の間に悉く衰頹に歸して了つたのである。然るに唯だ我日本帝國のみが亞細亞の絶東にありて、是等の諸國と反對に非常なる勢を以て勃興し來り、今や實に國運隆々歐米列強に伍して對等の關係を結ぶに至つた。之れ實に珍しき現象にして世界識者の等しく疑問とする處である。彼等は異口同音に「之れも同じく亞細亞の一國ではないか、何故に他が悉く衰滅に近き境遇にあるのに、日本のみが獨り彼の如く旺なる大帝國として發展し

來るであらうか」と驚異の眼を見張りつゝあるのである。

此の亞細亞の狀態に引換へて歐洲の有様は如何。歐洲諸國は過去五十年の間に驚くべき勃興をなした。獨逸帝國の如きも恰も日本の勃興と同じく、過去五十年來の事である。伊太利も亦然りて、佛蘭西とても亦古くない。而してバルカンの諸邦に至りては殆んど之れ五十年此方の事にして、露西亞の如き大國すら其國運の隆盛なるに至りしは極めて新しきことである。獨り是等と選を異にするものは英國であるが、併し英國とても今日の盛大を見るに至りしは極めて新しき事實である。斯くの如く歐洲に於ては近世に至つて凡ての國々が頓に勃興し來つた。而して亞細亞の一角に於て、我日本國民が彼等と共に勃興し來つたことは眞に珍らしき現象と云はねばならぬ。歐洲諸國の勃興せし原因は何處にあるかと云ふに、之れ實に國民其もの、勃興である。十九世紀の末葉より二十世紀の初頭にかけての國民的勃興程目覺しき現象は、吾等之を過去の史實に於て見出すことが出來ない。之れ眞に世界歴史の偉觀である。昔も國民はあつた、しかし近代人の云ふ意味に於ての國民はなかつた。近世に於ける國民的勃興

は眞に國民夫れ自身が勃興せるものであつて、一英雄一國王の剛勇英邁に起因するものでない。實に個々に於て醒めたる國民が幸ひにして然るべき指導者を得、勃然として頭角を表はし來つたのである。昔の國家が忽ちにして盛え忽ちにして亡びしは、之と反對に一英雄一國王に率ゐられて、國民が盲動したるに由るものであつて、彼等國民は唯だ器械の如く動いたまでである。然るに近世國民の勃興は國民個々の覺醒である。之れが最も適切なる例は米國であらう。米國の大統領となる人は蓋世の英雄であるかと云ふに必ずしもさうでない。大統領たり得べき人物は外に何程居るか分らぬ位である。而して又米國其もの、活動は大統領若くは其閣僚のみにて成さるゝかと云ふに決してさうでない。實に全米國民の力によりて成さるゝのである。

然らば我が日本帝國の勃興は果して何に起因するであらうか。之れ同じく人民個々の覺醒である。日本は維新の當初既に四民平等の實を擧げた。即ち普通教育を興して庶民の子弟を之れに學ばしめ、徵兵令を設けて何人の子弟も之に應ずるを得せしめた。而して明治十四年には國會開設の詔勅が發せられ、二十三年にはいよいよ代議政體を

布きて、國民が參政の權に與るを得るに至つたのである。斯くして我國の文運は非常なる進歩をなしたのであるが、之れは決して偉人英雄の力によりしにはあらず、實に國民の全體の勃興であつたのである。勿論維新の前後には少からず偉人傑士が起つて來た。乍併其英雄も人民の後楯なくんば何事も出來ざる迄に人民夫れ自身が進歩して來たのである。されば徳川幕府が瓦解したのも決して幕府以上の大英雄があつたのではなく、全く幕府が覺醒せる人民の輿望を繋ぐの道なかりしが爲である。故に維新の大業は人民と共に覺醒した人材の事業であつたと云ひ得るのである。之れは我國の過去に於て見出す能はざりし近代的精神の活動であつて、決して昔の忠孝道德にのみに歸する事は出來ないのである。而して換言すれば之れ實に泰西に於ける近世民主主義の勃興の影響であると思ふ。乍併我國が近代精神を受容するに至るには所謂昔ながらの我國固有の精神が其の土臺となつてをることは云ふまでもない事である。切言すれば我國は近代の民主的精神を容易に諒解し咀嚼するの準備が出來てをつたのである。民主的精神の種子は我國に於て美はしき沃壤を見出したのである。之れ亞細亞の他の諸

國が近世歐洲諸國の文明を攝取し吸收する能はずして衰亡せしに反し、我國が彼等と並行して遜色を呈せざる所以である。此頃我國に來朝せしスピア博士は云つた。「自分は亞細亞の諸邦を廻つて來たが何處にも歐洲近世の文明を消化し得たる國家なく、さうかと云つて昔のものは廢れ、如何ともする能はざる状態である。舊いものは死し近代的精神は興つて來ない。亞細亞の將來は果して如何に成行くべきか分らぬが、唯だ獨り日本帝國のみは歐米近世の文明を最もよく消化し、同時に其の固有精神を復活せしめ向上せしめて誠によく兩者を調和してをる。之實に驚くべき現象である云々」

之れを要するに世界の新興國が國民夫れ自身の力によりて立つに至りしは近世の偉觀である。此の歐米を源として勃興し來たれる近代的精神は我國にも漲り來つて、日本國民の衷なる固有精神と協同し、茲に新しき意味に於ける日本を築き上げたのである。此の國民的勃興は實に強烈なるものであつて、そこに一種の國民的性格を産む所のものがある。從て斯の如き國民は決して亡ぼすこと能はざる國民獨特の精神を贏ち

得るに至るのであつて、之れが國權の生命となるのである。之れは決して犯かすべからざる所のものである。此の國粹とも稱すべきものは今や各々其勃興せる新興國に於て發揮せられ、如何なる小國と雖も大國の壓迫を以て之れを亡ぼすこと能はざるの狀態となつた。昔は小國は大國の併呑に委し蹂躪に任せられた。然るに今日は如何なる小國と雖も之れを大國の意の儘に處分することは出來ないのである。それが出來ると思ふは過去の夢を追ふ軍國主義者の迷忘である。何故に然るか、國民の中に一種獨特の國民的性格が自覺せられたからである。彼のアルサス、ローレーンの如きは其の好適例であらう。彼等は僅かに佛國の一小部分に過ぎなかつた。然るに之れを割取したる獨逸は彼等のために如何に苦しんだであらうか。之れが統治には實に苦心慘憺したるのである。僅かに一州や二州にして斯の如し、況んや一國をや。如何に強大なる力を以てするも一國民の精神までをも屈服せんとする殆んど不可能事であると云はねばならぬ。此一種の國民的精神と國民的精神との衝突が即ち今回の大戦亂を惹起せりと云ふも決して過言でない。否今回の大戦亂に於て吾等は最もよく此國民的精神の衝突の

慘劇を見るのである。のみならず一の國家が他の國家を征服することの容易ならざるを見るのである。今回の大戦は武力の戦に於ては結局相與に疲弊するの外はなからうと思ふ。而して其の結果が如何なる覺醒を齎らすかは大なる問題である。然も吾人をして云はしむれば世界進化の大局より見て世界の識者が國民的精神の犯すべからざるものなるを覺り、又國民自身が之れを自識し、茲に百尺竿頭一步を進めて萬國主義の傘下に集り、よつて以て世界人類の經營を行ふの外はあるまいと思ふ。

我日本帝國は奮闘努力して此國民的意識を贏ち得た。而して之れがためには眞に血と涙との犠牲を拂つた。明治以來我國には内亂が二回外國との戦争が二回あつたが、其何れも皆之れ國民的意識を強くし、覺醒の機運を速かならしめたる所のものであつた。然して今や一大世界的大轉機に際會して居るのである。明治時代は光榮ある時代であつた。乍併それは過去となり了つたのである。而して今や大正の時代は來つた。由來人生にとりて大なる悲哀は一時代の過ぎ去り行く事である。其の時代と共に君主は去り偉人英雄も亦去て歸らない。死は人間に免れざるどころ時代はやがて歴史の中

に編まれねばならぬ。之れは一面より見れば確かに悲しむべきことである。此の意味に於て英邁無比の明治天皇崩御し給ひ、明治の時代が去つて大正の時代となりしは確かに大いなる悲痛事であつた。乍併吾等クリスチャンの世界觀、人生觀は死を以て萬事の終りとしなない。クリスチャンは實に死を以て生の始めとなすのであつて、死に對するの見方が違ふのである。之れは尋常茶飯の事にもよく表はれてをる。英語にては卒業式のことをコムメンズメントと云ふ。卒業のことを「始め」と云ふのは頗る面白い。併し之れ學校生活の終りなれど、更に進んで社會生活に入るの端緒であることを思へば實にコムメンズメントと云はざるを得ない。即ち新なる世界に入るの始業式なのである。クリスチャンの死に對する觀念は恰も斯くの如きものである。一時代の終るのは更に新しく尊き時代を産むの始めなのである。此の意味に於て大正四年十一月十日の大禮は國民の之れを歌ひ之れを祝すべき曠古の大典である。予は此の深き意味を自覺せん事を我國民に望まざるを得ない。若し然らずして唯だ一種のお祭騒ぎに終るならば、夫れは有り觸れたる一個の儀式に過ぎずして、國民は洵然として太平の夢

を貪る外なからうと思ふ。此の大なる意義ある新日本誕生の大典を見て、唯だ之れ歴代の皇統をつぎ給ふ一個の儀式とのみ思ふ人々は、一時代が去りて新なる時代が來るのは人生の約束である、生あれば死あり、始あれば終あり、盛なれば衰へ、盈つれば缺くるは天地自然の法則であると見るのである。之れ即ち東洋的唯物的思想家の見である。彼等は何物を見ても盛者は必滅、諸行は無常と感ずるのである。故に彼等は明治時代の光輝燦爛たる文明を顧み、其英邁なる君主の崩御を見て斷腸の涙を絞つた。天道是非かどさへ叫ぶものがあつたのである。而して過去の光耀に戀々として明治時代より光輝ある時代はなしとし、大なる時代の影を暮ふてやまないものである。然るに時の波動は休止する事なく押しよせ來りて、英邁なる明治大帝を史上の人となし、光輝ある明治の御代を歴史に編入し、茲に大正の新政を現出したのである。

大正時代は如何なる時代であるか。世は大正となつて三年を出でざるに有史以來未曾有の大慘劇の幕は切り下ろされた。而して新天新地の産るべき生みの劬しみは今や阿鼻喚叫の聲をあげてをるのである。此秋に當り今上天皇陛下が萬世一系の大統をす

べ給ひ、然も我國が此大戦亂に参加するに至つたのである。大正時代は初頭より斯る大舞臺を踏まねばならなかつたのであるか。嗚呼誰か明治時代を以て空前絶後の黄金時代となさんとはする。而して何時までか之に戀々として望みなき婦人の號泣を敢てするものぞ。斯る新時代に遭遇せる吾等日本國民は大なる覺悟を以て如何に此大舞臺に折衝すべきかを考へねばならぬ。日本は一面より云へば既に完成された。國民的精神も今や犯すべからざるものを獲得した。日本國民は最早何物の威武も之れを屈すべからず、如何なる力を以てしても之れを亡ぼすべからざるものとなつた。乍併世界の舞臺に於ける日本は、寧ろ之れからがコムメンズメントである、足踏みである。日本は英佛諸邦と共に大戦亂の渦中に投じたのである。思ふに此の大戦は實に單なる交戦諸國のみの戦争ではない。實に全世界の戦争である。中立國と雖も殆んど戦争に参加せると同様である。例令ば北米合衆國の如き最も嚴正に中立を守つて居るのであるが、然も此の戦亂には最も密接なる關係を有するものである。如何に此の大活劇の終局を結ばしめんかは米國の最も腦漿を絞れる問題であらう。新世界創造の理想は米國の日

夜考究を怠らぬところのものであらう。故に米國の如き嚴正中立國すらも其實此戦争に参加してをると云ふことが出来るのである。我日本帝國は歐洲に交渉なしと云ふことは出来ない。實に深甚なる關係があるのである。日本國民は根本的に覺醒せねばならぬ。今回の戦亂のために軍需品によりて金儲けが出来ると注文品の調達に没頭する如きは淺薄極まる話である。金儲けは一時的の事である。例令一億圓を儲けたりとて十億圓を得たりとて國家永遠の大局の上より見て畢竟何の得る所ぞ。吾等の考ふべきは此の戦亂の終局に際し、急轉直下の勢を以て發展し來る世界の精神的新氣運に、我日本帝國が見事に乗することを得るかと云ふことである。而して他の諸大國と共に、來らんとする新しき世界に向つて何物を貢獻し、何物を寄與することを得るかと云ふことである。此意味に於て吾等は、大正時代の出發點たる今回の大禮典を祝し、國民の精神的覺醒を促さんとするものである。吾等が斯る光榮ある時代に遭遇せしことは眞に感謝すべきである。我一個としては明治時代の光澤に浴し、更に此大正の新時代に於て皇恩に浴するを有難く思ふのである。我は明治時代以前には一個の柳川藩

士として十二萬石の小天地に跼蹐してをつた。五里行けば外國で旅行免狀がなければ他の藩内には自由には行かれぬと云ふ恰むべき有様であつた。而して吾等は一旦事變あれば君の馬前に討死するの覺悟を以て養成されたのである。即ち藩主の馬前に一命を捧げねばならなかつたのである。然るに世は王政の復古となり明治の時代となつて、我は小なる柳川の藩士にあらずして、大日本帝國の臣民となつたのである。此の日本國民たるの自覺は大なる力であつた。我が忠勤を擯んずる所のものは十二萬石の領主にあらずして實に三千萬同胞の君主たる天皇陛下であるとは、如何に大なる差異であらうか。之れ實に我にとりて大なるインスピレーションであつたのである。我は今日尙此感想を忘るゝことは出来ない。我は日本國民にして我が行動は係つて國民の上にあると思ふ時、我が内には眞に血湧き肉躍るの感を禁じ得なかつたのである。然るに明治時代に於て更に大なる自覺を興へられた。夫れは即ち天より來れるもの、心の奥深き所に起れる良心の聲である。換言すれば基督によれる世界的人道的精神の喚發である。茲に於てか私の關係する所は世界にあることを悟るに至つたのである。日本國

民たると同時に、世界人類の一員たるを自覺し、我は世界人類の福祉のために一臂の力を致すことが出来るとの確信を得たる歡喜の情は、之れ實に言語の表はず能はざる所であつた。我は之れを我國民の間に傳へんとして、過去四十年の間奮闘し來つたのである。

今や大正の時代は大なる意義ある轉向をなし、世界は新たに改造せられつゝあるのである。神は我が國民をして世界の民たらしめんとし給ふ。「眼を世界の大局に注げ」とは大正の新天新地に充つる聲である。此時に當りて徒らに國內に閉居して、毫も世界の大勢に着眼せざるものあらば、之れ實に自ら瞑目して天地は暗黒なりと云ひ、隔戸を閉ちて太陽の高く昇りたるを知らざる痴者と選ばざる者である。慘憺たる戰亂の渦中より般々たる砲煙彈雨の間より、光輝燦爛たる新しき世界に産れつゝあるのである。我が衷に之れを待つ用の意あるものは幸なるかな。恰も燈火を用意して新郎の來るを迎へし賢き乙女の如しである。吾等は封建時代の精神を捨てて明治時代を迎へた。然るに封建の遺風に戀々たりし人士は世は明治となるも之れと協力し、之れを啓導す

るの道を知らず。徒らに過去の甘夢に憧がれたるを以て、明治時代に於ては何の役にも立たぬ人となり了つた。過去の社會に於ては勢力ありし人が、明治の社會に於ては無用の長物となつた。宜なるかな、封建の時代には人民が土下座して敬意を拂ひし人が、明治の時代には何等なすなき不用の人物となり、却つて彼等に向つて土下座せし者共は明治の世を極めて有意味に過し來つたのである。之は移して以て今後の日本人に適用することが出来る。明治時代の日本は國力充實の時代である、大正時代は世界の舞臺に乗り出し世界の諸國と共に世界の經營に當るべき大なる時代である。されば明治時代の考へを以て單に國家社會の利害得失を念とし、毫も他を顧みざる人士は大正の世界的新時代には無用の長物となること、封建人士が明治時代を迎へて快々として無爲の生涯を送りしと一般である。されば苟も世界の舞臺に乗り出し世界の人士と共に世界の經營に參せんとする者は、須らく萬國主義的精神を以て世界の人類を同胞とするの觀念を立たねばならぬ。日本國民の世界的誕生！之れ實に大正年間に於ける吾等の一大事業である。大正の時代は明治時代よりも更に尊く更に大なる而して更

に意義ある時代である。吾等は此大なる時代の初頭を飾る曠古の大典に際し、眞に衷心の赤誠を披瀝して之れを奉祝するものである。新天新地の幕は開かれた。識者は國民の迷蒙を開き、基督によりて示されたる人類同胞の大義を高調して、世界的萬國的新機運に對し貢獻せねばならぬ。大鳳は何時迄も巖岫に止らず、必ずや翼をはつて大空に飛躍するのである。日本國民は斷じて狹隘なる巢中に閉塞すべきでない。吾等は舊巢を蹴つて一大飛躍を試みねばならないのである。

偉大なる國民の性格

凡そ世の中に人の心ほど不確實にして信頼し難きものはない。實に人心の變轉速かにして頼む能はざる、秋の空に比せらるゝも亦宜なるかな。國家も亦斯くの如きものであつて、人心歸一する所なく君主亦專斷にして、常に自が心の儘に振舞ふ時には、上下互に相信頼することは出来ない。茲に於てか一國には國法國憲なるものを設け、信頼しがたき人心を制肘し、束縛して國政の動搖を防ぐのである。故に往古より「掟」

とか「法度」とか云ふものがあつて、何物よりも確實にして信頼すべき物として之れを尊重した。之れは曾に政治上の事に限らない。宗教に於ても科學に於ても同じく信條とか定理とか云ふものが重んぜられてゐる。例へば佛法は佛ののりであつて、萬古不易のものとして重んぜられ、又科學に於ても夫れ／＼理法なるものありて其研鑽攻究は一に其理法によるの外はない。又此の天地宇宙には嚴然として犯すべからざる天則あり、天體の運行を始めとし森羅萬象は皆此の天則に循ひて各其行くべき道を行くのである。世に此の宇宙の天則ほど信頼するに足るものはない。

往古彼の猶太の學者は律法を尊重し、神も此道義的法則には制肘せらるべきものと考えた。之れは眞に偉大なる思想であつて、其中には深き眞理が存するのである。彼等が立派なる律法を有し之れを行ふ國民は最も偉大なる國民なるを確信し、只管之れが達成に熱中したのは眞に故ありと云ふべしである。現代の日本に於ても憲法の完成に努力し、唯憲法さへあれば國家は泰山の安きを得、國民の幸福は増進せらるゝものと考へた。而して日本の教育家は科學の法則をさへ闡明し、之れに通曉すれば人生の

萬事は釋然として氷解し、天地の事象は悉く掌を指すが如きものであると信じたのである。勿論是等の主張には一面の眞理がある。轉變質ならざる人心を當てにせずして萬規整然たる法律の明文に準據する所の國民は、他の法律なき國民に比して偉大なるものである。乍併法律の神聖を過信し、人間萬事皆法律に倚賴するは之れ法の奴隷と云はねばならぬ。法は死物である、既に死せるものを以て活ける人間の行爲を律せんとするは之れ實に人間を侮辱したものと云はねばならぬ。法を以て放逸なる人心を拘束するは確かに萬全の策であらう。乍併之れを以て萬人を律せんとするは之實に人格に對する絶大の侮辱ではなからうか。我國に於ては憲法布かれ法律備はり法治國として殆んど遺憾なきものである。乍併今日之れを以て決して偉大なる國民となり得たりと云ふことは出来ない。且教育上の規矩となるべき尊ぶべき勅語は下賜せられ、國民道德の大本は示されたのであるが、我國民は品性人格共に圓滿高潔の域に達したりと云ふことは出来ない。假令如何に完備せる法則あり規矩ありとも、よく之れを運用し實現し得る活ける人格なくんばそれは畢竟一の空文に終るの外はないのである。然らば

其法の動力ともなるべきものは何ぞや。教育勅語の精神を遺憾なく發揮する所のものは何ぞや。夫れは即ち「意志」である。此の意志の發動によらざれば如何に完備せる法則も、斷じて其精神を發揮することは出來ないのである。されば其意志こそは宇宙の生命であり、社會進歩の基礎である。

基督は肉體に係る律法の例に循ひて立つにあらず、朽ちざる生命の能に循ひて立ち給ふた。其生命の能とは即ち意志を云ふものである。吾等が基督によりて示されたる神、或は又舊約によりて示されたる神は宇宙の律法を云ふのでない。實に此の活ける能即ち意志を云ふのである。基督は神により換言すれば意志によりて祭司となり王となり給ふた。律法と豫言とは儀文となつて廢ることもあらう。されど活ける靈能即ち意志は人をして王たらしめるのである。使徒パウロが力を極めてモーゼの律法を破壊せんとしたる所以は此處にあるのである。此意志の自覺は人をして新天新地を見出さしむる。此意志は確かに偉大なる國民の性格の基調となるのである。此の尊き靈能の獲得は之れ實に萬法の上に超然として、自治自發、獨立獨行の人格を生み出す根本原

因である。人の身體の主なるものは心であつて此心の根柢は意志である。此意志は吾人自らを治むる本尊であつて、情感も智識も共に意志の支配を受くべきものである。意志の薄弱なる人は如何に純美なる情操あるも、如何に深遠なる學識を有するも畢竟之れ人格的不具者にして、結局其身の破滅を來す外はないのである。意志は自己を治むる主權者である。吾人が神を信するは、其律法の嚴として犯すべからざるものがあるが故にあらずして、實に神の中に宇宙を統治する無限絶對の意志があると信するからである。國家に就て見るも、其國民の意志の鞏固なるものが最大の統治力を有するものたるは明かなる事實である。之れを現代の世界に見るに、彼の英國は歐洲の一島國なるに拘はらず、殆んど世界の全面に亘りて廣大なる領地を有し、彼等をして英國には日没なしと云はしむるものは、寔にアングロサクソンの鞏固なる意志の力に基くのである。由來意志の鞏固なるはアングロサクソン人の長所であつて、英國人の特色は茲に存するのである。予は彼のウォータローの大戦の記事を讀むとき、感懷禁する能はざるものがある。不出世の英傑ナポレオンは徹頭徹尾天才的であつて、彼の潑瀾

たる銳氣は普く兵士走卒の間にまで漲つてをつた。然るに一方ウエリントン元帥の率ゆる英國兵士の態度は唯だ之れ意志の衆團かと思はるゝ許りにて、上は元帥より下一兵卒に至るまで凜乎として犯すべからず、自制の念は面貌の上に遺憾なく現はれてをつた。即ち全軍之れ意志にしてウエリントン將軍は實に意志中の大意志であつた。されば彼等は地の利を得ざりしに拘はらず、精銳を盡したる佛兵の猛烈なる襲撃にも、能く防ぎ能く戦ひ毫もひるむ色はなかつた。否啻に能く防禦したるのみならず、機會に乗じては逆襲をすら試みたのである。而して最後の會戦に於て、佛蘭西の近衛兵が獅子奮迅の勢を以て進んで來た時の如き、唯數名の將校が前面に監視してをるのみで、何處に軍勢が居るかど疑はしむるばかりであつたが、敵が怪しみながら四五十米の距離に迫り來るや、「突貫！」の一令の下に忽ち起き上り方陣を布いて敵中に躍り込み、一騎當千の銳兵をして、散々に潰走せしめたるは眞に敬歎の外はない。此の英軍の沈勇は勿論意志に根ざすのである。英國が今日の隆盛を致せるは實に彼等民族の鞏固なる意志の賜物であると云ふも過言でない。

彼の獨逸民族も亦意志の國民である。殊に其の北部獨逸の如きはカント、フイヒテの如き意志の哲學者を出し、ビスマークの如き意志の政治家を生んだ土地であつて、其國民は卓拔せる意志の國民である。特にビスマークは天性才智の人であつて聰明なる理智を有したに拘らず、よく之れを制馭し、如何なる野心にも頑として動かされず、斷々乎として其國家的目的に向つて一線に直進したる意志は眞に目醒ましきものである。此のビスマークの鞏固なる意志は普魯西を勃興せしめたる一大原因である。而して普魯西の勃興は今日の獨逸帝國の隆盛を來したのであつて、獨逸が彼の如く強盛なるは實に國民上下の意志の確固不拔なるものあるに因るのである。北米合衆國亦然り米國の國祖とも云ふべきワシントンが時人に卓越して居つたのは意志の力である。政治の才に於てはハミルトンの方が優つてをつたが、内閣に於て最後の斷案を下したものは即ちワシントンであつた。彼は一度決斷したる事は、如何なる障害に遭ふとも斷じて之れを翻さなかつた。之れ彼の偉大なる人物たりし所以である。其他グラントと云ひリンコルンと云ひ法官マルシャルと云ひ、代々の大統領及高等法官は皆同じく意

志の偉人であつて、現代米國に於ても大統領ウイルソンを初めとし、ルーズベルト、タフト等皆其人格の根柢は意志にあるのである。之れ實に今日米國が堂々世界に濶歩する所以であつて、米國人其物が又英國と同じく眞に意志の國民である。翻つて我日本帝國に見るに、維新以來、國歩困難の秋に際し、國家の經營に參じたる人々中、最も卓越せる人物は大久保甲東であつた。勿論經綸畫策に於て伯大隈は一日の長があり、又臨機應變の才能に於て伊藤公は彼の兄であつたであらう。乍併最後の一斷を宣するものは、常に必ず大久保公であつた。而して此の大久保公は我國人に於て稀に見る意志の人であつたのである。

是を以て之を見れば、世界の覇權を握れる偉大なる國家の特色は決して完備せる法律あるがためではない。實に確固不動なる國民の意志に根柢するのである。而して此意志は法のために支配さるゝものにあらずして、却つて法を支配し、法を活かし、法の精神を發揮せしむるものである。換言すれば法は即ち意志に隸屬して初めて其効力を表すものである。然るに古來此意志は深く蔽ひ隠され、人心危く道心仄か也な

ごと稱し變轉定まりなきものとして、法こそ唯一の憑據なりとて之れがために束縛制肘せられざるを得なかつた。然も法に拘束せられたる意志は眞の意志ではない。眞の意志は發すべくして、未だ發し得なかつた處のものである。切言すれば在來の意志は似て非なるもの、主我的なるものである。予は今此尊重すべき人格の根柢なる意志を道義的意志といふ。此の道義的意志は決して影の如く變轉して信賴し難きものではない。實に確固不拔のもの永遠不滅の實在である。吾人の信する神に愛の力ありと云ふは實に此道義的意志の表現を指すのである。神は永遠より永遠に亘りて存する一の實在である。其道は取もなほさず道義的意志にして、そこには偽なく邪なく悪なく暗なく、眞にして正しく美しくして清き愛の發現のみである。人生は暗黒にして苦痛の巻なるが如きも、神を認むる眼より見れば患難にも喜びをなし、苦痛にも恩寵を感じるものである。何となれば實に人類に對する神の道義的意志の發現なればなり。故に吾等は衷心より神を信することが出来るのである。吾等が神を信する所以のものは、實に神が愛にして道義的意志の根本たるを信するからである。個人相互の信賴は其意志

を信するからである。夫が妻を信するは其の道義的意志を信するが故である。何となれば我が友又我が妻は斷じて偽り得ざる道義的意志に立脚して居るが故に、假令世を擧げて彼を非難することも、我に於ては毫も彼の良心を疑はぬと心中深く期する者あるからである。之れを押し廣めて行けば社會相互の信頼となり國民相互の信頼となるのである。故に社會も國家も皆此道義的意志を根本として組織せられなければならぬ。政府は人民の道義的意志を信じ、人民は政府の道義的意志を信じて上下相協力せざれば國運の隆盛は期し難いのである。此道義に基づく意志は最も忠良なる人民の心にやどるものにして、之れ位法律の精神に沿ふものはない。吾人は毫も法律に通曉せざるものである。然も未だ曾て法網に觸れたることはない。之れ我が衷に善良なる意志ありて我を宰ればなり。世に自繩自縛と云ふことがある。よく法を解し法の細項に通じたものが悪事を働き、其制裁を受くる類を云ふのである。斯る例は世に尠くない。之れ道義の觀念に缺如せるがためである。乍併善良なる意志を有するものは、其意志に基きて行動するを以て毫も罪に陥るの機會がないのである。法は斯る人々のために設

けられたものでない。斯る人は寧ろ法の擁護者たる地位にあるものである。

斯くの如く道義的意志は人間生活の根柢である。若し國民全體が此道義的生活をなし、生活の基礎を意志に据ゆる時は、其國民は初めて偉大なる國民たるの性格を贏ち得るのである。斯くてこそ列國の間に立ちて友邦の信頼を博し、世界の表に濶歩することが出来るのである。之れに反し道義的意志に立脚せざる國民は斷じて大國民として發展することは不可能である。若しも我國民にして此の尊き性格を獲得すること能はざる時は今日の隆々たる發展も眞の目的を達せず、遂に凋落の非運に際會して槿花一朝の誇りを止むるに至るやも計られない。今や世界の思潮は道義的博愛人道の上に覺醒しつつある。我國のみが徒らに軍國主義の迷夢に惑はされて世界の趨勢と逆行する時は帝國の前途や眞に暗澹たるものである。故に吾人は我國民が道義的意志に覺醒せんことを叫ばざるを得ない。憲法や法律は他より翻譯し移植することが出来るが、國民の道義は斷じて翻譯によりて之れを體得することは出来ない。一に國民各自の自覺に由る外はないのである。我國の政治界教育界實業界其他有ゆる社會の一大缺陷は

凡ての組織の根柢を此道義的意志に置くことを知らないことであつて、そこから種々様々の厭ふべき事件が発生して來るのである。之れ實に明治創業の先覺が徒らに形式の完備に功を急ぎ、其の基礎たり根柢たるべき隠れたる精神に着眼せざりしが故である。制度法律科學工藝所謂西洋文明の爛漫たる花實をのみ取り來つて、其幹根に注溢せる精神的文明を閑却したる結果である。されば日本國民をして偉大なる世界の民たらしむるには此道義的意志を獲得せしめねばならぬ。然らば此意志は如何にして我物とすべきであらうか。之は徒らに修養々々と云つて得らるべきものではない。實に其道義の根柢なる純全なる宇宙の大意志に我が衷心の誠意を結びつけねばならぬ。宇宙の神に絶對的に服従せんとする心、神の聖旨に應はざれば何事も之れを爲さずとの大丈夫の決心、之れ即ち道義的意志の發足點である。かくて努めてやまざれば遂に堂に達し得ることが出来るのである。

人はメロデイを歎賞すれども更らにハーモニーを歡喜す。吾等若し神の中に生くる時は神は我が衷に絶對の力を及ぼし給ふ。茲に鞏固なる道義的意志の根柢を立して、

其善意志の欲求するがまゝに行動する個人々々の心情が美はしきメロデイを成し、それが十人となり百人となり、千人となり萬人となり遂に一國の人民悉く、心の堂奥より協力一致して大なるハーモニーを作る時、世にも尊く美はしき偉大なる國民の性格が燦爛として其の光彩を放ち來るのである。

民族發展の理想

基督は旭日登天の勢を以て傳道に成功し給ふたが、然かも強ちに樂觀し給はず、寧ろ大に悲觀し給ふたのであつた。彼の播種の比喻の如きは之れを證するものであつて播かれたる種子の四分の一だけが實を結び、四分の三は遂に徒勞に了つたのである。其の中或物は一時は實りさうに見えたのであるが、遂に枯稿して了つた。即ち一時は大に望を囑せられてをつたのであるが、遂に其完成を見るに至らなかつた。其の骨折の四分の三は空しく徒勞に歸したのである。而して又彼の烏麥の比喻によれば、善き種子が播かれたのであるが、敵人來つて其中に烏麥を播いたので小麥の苗も、烏麥の

ために驅逐せらるゝ危険があつたが、遂に最後の場合に於て辛うじて小麥は成熟するを得たとある。又基督は天國を以て網打ちに譬へ給ふた。網の中には善き魚も悪きがらくた物もはいるのであるが、後にならぐたは捨てられるのである。斯様に神の國の生長發達の道程には善惡混淆、正邪錯雜して居る。乍併基督は最後まで悲觀し給はず、善者は必ず榮え、正しき者は最後の勝利を得ると確信し給ふた。而して今一つの比喩は神の國を廣むる處のものは、恰も新しきものと舊きものとを倉より出す家の主の様なものであつて、彼は新しきものと舊きものの中より眞に價値あるもののみを分ちて保存し、然らざるものを捨つると云ふのである。

今民族發展の有様を稽ふるに恰も斯くの如きものがある。民族の發展に於ては母國に於ける總てのものが其發展地に於て暴露される。民族性の善惡、缺陷長所が實に憚かる處なく實現されるのである。母國にては多少掩はれて見られぬものが、殖民地に於ては遠慮なく暴露されるのである。故に一面より見れば眞に悲觀の外はない。乍併また他の一面より見れば民族中の一種の理想が、そこに自から實現して來てをる。唯

に其發展地に於て在來の人民と競争して優勝劣敗の理法を表現するのみならず、母國の中にありては正邪混淆して表面に表はれ來らざりしもの其ものが、そこに於て優勝劣敗の理法により自から淘汰せられ、茲に一種の適者生存の行はるゝを見るのである。殖民地は母國の鏡である、若しも母國に於て悪いものが勢力を逞しくしてをれば、發展地に於ても見苦しきものが多くなり、善い勢力がつけければ善良なる傾向が多くならざるを得ないのである。

余は先日來鮮滿の地方を旅行して大に感慨を深くした。どう云ふ風に我民族は彼地に發展しつゝあるのであるか。余は今茲に悪い方のものは云はない。又さう云ふ方面は見やうとしなかつた。其善良なる状態光明なる方面勝利を得つゝある方面を紹介したい。何となれば之れ日本民族の眞面目であるからである。第一吾々の喜ぶべきは彼地に於て我が日本の民族的理想が實現されつゝあることである。斯かる民族的理想は如何なる人物が之れを實現して行くのであるか。殖民地にある人物は眞に玉石混淆、烏麥と小麥の如く、網中のがらくたと魚の如きものであるが、併し其中には我民族の

中に於て眞に優秀なるものがある。例せば日本の政治家として見れば總理大臣の資格あるのみならず、幾度か總理大臣として押されたる人が總督として居る。即ち民族中の最善を送つてをる。従つてそこに協心戮力せる人々は之れ又内地政治家の中にも遜色なき人物である。然り少くとも第一流の地位を占むべき人物が、民族發展のため努力してをる。又學者としては將來帝國大學の教授、總長たるべき才能と天品とを有する人物が行つて諸種の經營に當つてをるのは疑ひない。之れは朝鮮のみならず滿洲亦然り。彼地に於ても我日本の政治界、教育界に於て二流と下らぬ人物が働いてをる。實業界に於ても亦然りである。夫れ等の人々が如何にしてをるのであるか。彼等は日本内地に於て實驗せるもの、明治以來實驗せる所の善良なるものを彼地に實施せんと奮闘してをる否實施してをる。日本内地に於て役に立たぬ舊いものをやるのではない、未だ經驗せざるよいものを持つて行つて、彼地に於て之れを實現せんとするのである。之れは慥かに一種の理想を實現してをるものと云はざるを得ない。朝鮮には鮮人の心に安堵を得させたいと云ふ決心を示し決して手を退かぬ、何處までもや

り通ふすと云ふ土臺を明かに示して居る。故に其施設する所のものも間に合はせものでなく永久的のものである。例せば彼の朝鮮銀行の如き眞に立派なもので、東京に於ける日本銀行に譲らざる大建築である。其他何事でも皆永久的計畫の下に實行されてをる。朝鮮人は日本人が飽くまで永住的態度を以て事業を經營してをる、故に根柢深く且つ着實であると云ふことを看取し、眞に安堵してをるのである。勿論中には非難すべきものもあらう。されど大體の方針が永久的であつて其目的の着々として達せられつゝあるは何人も疑ひなき處であらう。日本人の朝鮮に於ける經營は僅々十年にして、眞に日尙淺いのであるが、其間の成功は實に目覺しきものにて、内地の善良なるものが着々實現しつゝあるは掩ふべからざる事實である。之れは即ち内地の勢力の増進を意味する。而して増進せる文明力は茲に發展して内地に於ては行ふこと能はざる新計畫、新機軸を朝鮮滿洲に於て試みんとしつゝあるのである。今日朝鮮に生れ朝鮮に育つた少年が、十年の後に日本に來遊するとせば、彼等は寧ろ朝鮮を以て母國よりも發達せりとなすであらう。斯様に彼等は朝鮮に於て新天新地を拓きつゝあるので

ある。

更に予が壯快に感じたることは、朝鮮より滿洲にかけて一種の精神が鬱勃たるを認めざるを得ざることである。何ぞや夫れは即ち日本の負けじ魂である。此の負けじ魂は滿洲に於て遺憾なく發揮されてをる。我民族は今日之れを朝鮮又は支那民族に對して發揮するを要しない。併し露西亞人に對しては大に之れを發揮するの必要がある。彼等は其の豪宕魁偉の精神と體力とを以て、歐洲よりウラルを超えシベリアの荒野を横ざり、滿洲に入り來つて眞に壯大絶無大の經綸を實行した。其の建築の堅牢なる其規模の廣大なる實に古今に冠絶するものにして、我日本人の北海道の經營の如き彼等の滿洲經營に比すれば眞に兒戲に等しきものである。日本人の經營は田舎角力にして彼等は國技館に於ける三役の角力とも云ふべき大經營である。其尨大なる事業を我國が引受けて經營することゝなつた。これを日本人がやり切るであらうかとは、世界の等しく刮目したる處である。然るに日本人は大丈夫やれると確信して起つた、而して其の負けじ魂を發揮して之れに當つたのであるが、果して立派に之れをやつてをる。

加之彼の施設の不備缺陷を改良して、更により善くより大なるものとなして之れを經營してをるのである。是れは決して附け元氣でなく日本人本來の面目である。換言すれば日本人の深き根本精神にして、由つて立つ所のものである。彼の大連の如き元より露人の經營せしものであるが、日本人が之れを引受けてより如何に進歩せしか思ひ半ばに過ぎる。而して最も著しきは長春である。此地は日露勢力の接觸地點であつて市街は露西亞人街と日本人街と二十丁許り距れて相對してをる。然るに今日は日本人街の方が立派となりて其繁榮は新市街たる日本人街に移り、露西亞人すらも日本人街に居住する位で、歐洲の旅客などは競ふて日本人街の旅館に宿泊する。之れ實に日本人の負けじ魂が遺憾なく發揮せられたるものに外ならぬ。

然るに茲に考ふべきは滿洲に於ける我民族の非常に不揃なることである。旅順の工科學堂に於て講演をなしたる時、民政長官は予に向つて「内地から中學卒業生が來るが、其不揃ひな事には驚くの外はない」と語つた。夫れに對し予は「日本人其物が實に不揃ひである」と云つた事であつた。以上述べたる事業の如き、誠に日本人の誇り

とするに足るべきものであるが、夫れは少数者の頭の中に、一個の大なる理想があつて、夫れが形を取つて表はれたるものに外ならぬ。此の理想實現のためには彼れは實に自からの腦漿を絞りたるのみならず、或は内地に或は海外に、視察研究を重ねたる結果、茲に一大計畫として之れを表現するに至つたのである。然して斯かる少数の偉大なる頭腦があり、又之れを實行するに遺憾なからしむる資本家がある。つまり頭と金と此の二つにて經營さるゝ所のものが、見るべく尊むべき滿洲經營として表はれて來たのである。此少数者の頭腦は決して一朝一夕に出來たものではない。永い／＼間訓練せられ陶冶せられた頭である。此民族中の最善なる頭の中に生れた理想が所謂負けじ魂と一致して、以上の如き優秀なる計畫となつて表はれたのである。彼の撫順炭坑の大計畫は松田某が時の總裁後藤男の信任を受けてやつたのであるが、男は彼に任するに一切の權能を以てし、一千萬圓の金を勝手に使用せよと云つたさうである。之れ男が彼の人物を認識したるがためであつて、彼に一任すれば間違ひないと信じたからであらう。此に於てか彼は其頭に理想し研究したることを、撫順炭坑に實現した。

予は今回具さに之れを見たのであるが眞に偉らしいものである。予は北海道並に九州の炭坑の一部を見たのみで炭坑の智識はないが、併し之は確かに廣大なるものである。且つ市街其他のやり方は日本にて見ることが出來ない。否歐米に於ても多く見るべからざる文明の大施設にして、吾等をして快哉を叫ばざるを得ざらしむるものがある。彼は炭坑事務所を中心として一切の市區街路を其腦中のプランに従つて建設したのであるから、大小の家屋皆夫れ／＼に意義を有し、一として東京の商家のやうに雜然として、大小思ひ／＼に建てられたる無意義の建築はない。予は曾て滿洲の平野に大學校を中心として市街を建つことを想像して見たことがある。其の予が想像の市街と、撫順の市街とが偶然にも附節を合するが如きものがありしは、予をして一層感興を深からしめた點である。

斯様に頭のある人々が其理想を實現するに巨大なる資本を以てするのであるから所謂鬼に金棒である。然るに是等の大事業に關係ある人々を除いた個人々々に就いて見れば彼等は實に區々まち／＼にして、一二の除外例はあるが、其殆んど凡てが何の目

的もなく、計畫もなしに蠢動してをる。而して只一時的間に合せの設備の下に、一攫千金を夢み、少しにても金を得れば内地に通じ歸ると云ふ、眞にあさましき人々で、恰も内地の下水が満洲の野に溢れ出したかの觀がある。乍併彼等少數偉大の人物に代表せられたる滔々たる文明の大潮流は之等の泥水に汚されざるのみか、之れを押し流して、彼等をも亦清き理想の大海に導き行くのである。故に彼等個人々々は此大人物によれる大經營の感化をうけて向上し得べものは向上發展し、然らざるものは衰滅して行くのであるが、日本民族の満洲經營てふ大局の上より論ずる時は、我民族は彼地に於て、日進月歩の勢を以て發達しつゝあるのである。唯茲に何處となく吾々をして慨歎にたへざらしむるものは内地の缺陷が其儘に彼地に暴露せるを見る一面の消息である。即ち日本人が之まで深く養はなかつた所の世界文明の思潮を指導すべき宗教的信念其物の缺如である。今日内地に於て之れがない。唯だ吾等少數者の間に之れあるも、之れは國民全體より見れば誠に微々たるものにして恰も温泉の如きものである。多少の元氣を回復し、病痾を癒やすことは出来るけれども、一の江流として滔々流れ

來つて國民を濕ほすことは出来ない。即國民全體の精神生命となる事は出来ないのである。此一大缺陷は内地に於て然る如く朝鮮滿洲に於て亦然りである。之れ實に吾等の遺憾となす所である。乍併吾等と信仰を同じくする人々滿洲の地に少くない。彼等は教會を持たないのであるが、是迄に却々よい隠れたる仕事をしてをる。或農業を經營する幾何のクリスチャンは三十町歩の農場を有し、永住的覺悟の下に支那人を使用してをるとの事である。又或人は深く基督教を賛成し、やがて信者となるべき立派な信仰の人で、滿鐵某驛の驛長である。彼が轉任することゝなるや其土地の支那人は之を聞き、何卒留任して下さいと續々やつて來て彼を引止めた。而して已を得ずんば御家族を残して行つて下さいと願つた。支那の古文書に役人の轉任を啼泣して止めると云ふことが記されてあるが、彼は今日夫れを實際に經驗してをるのである。實に好個の美談ではあるまいか、予は遼陽に於て講演した時、日本人の中に支那人のために命を捐つる者が出るであらう、又出ねばならぬ。彼等は其時こそ本當に日本人に親しむであらうと語つたのであつたが、其後で滿洲鐵道經理部に起つた話であると云つて

斯う云ふ話を聞いた。曩頃日支交渉の際、そこに勤めて居る二人の支那人が辭職を申出でた。其時一人の上役は云つた。君等の身の上に断じて危険の及ばぬやうにする、私が命を捐ても必ず君等を救ふから安心して止り給へど。そこで彼等も其意氣に感じて其儘止つた云々。之れ實に基督の精神である此義烈の精神には何人も感動せざるを得ない。日本人に若し此精神があれば支那人は必ず心より日本人と親しむに違ひない。又滿鐵の厚き保護の下にありて全く馬賊の憂なきため、支那人が安心して居る處が少くない。之を要するに日本人が親切且つ條理を以て支那人に對すれば、彼等は必ず歸服するであらう。仁政は支那人の尤も喜ぶ所のものである。此精神は今日滿洲に於て少數者の中にあるが、然し少からざる感化影響を與へてをる。或所には驛長にてクリスチャンたる人があるが、彼は實に品行方正の徳を以て其市に深大なる感化を與へてをる。又日本の淑女が滿洲に行くのは彼地の日本人を救ふ所以である。滿洲が近來風俗風儀の上に非常に美はしくなり來りしは、之れ等内地の教育ある婦人が多數彼地に渡りて美しき家庭を形造るからである。彼等が健氣にも夫を助け、子を産み育児

にいそしみつゝあるは、民族發展の大業に對し最も重要な役を務むるものである。而して是等の婦人の中にクリスチャンが少くないことは注意すべき點である。余は撫順に於て禮拜説教をなしたのであるが、男子よりも女子に信徒多く、然も皆立派な修養ある婦人であつた。彼等が此新しき地方に來りて其信仰に依れる家庭を作ることが如何に直接間接に感化を周圍に與ふるか、蓋し思ひ半ばに過ぐるものがある。尙ほ茲に附言すべきは殖民地には健全な子供が生れることである。彼等が内には母として健全なる後繼者を得、外には婦人として一種清新の氣を作振するの効は眞に没すべからざるものである。

斯くの如く民族發展は終局に於て、高明なる理想を有する善良なる人物が最後の勝利を得るは掩ふべからざる事實である。故に滿洲に於ても、信仰と理想に依れる我黨の人士が遂に彼地の指導者となり、大勢を支配するに至るは自明の理である。文明の進歩は河の流れの如く、決して逆行することは出来ない。日本は明治維新以來駭々乎として文明の順潮に掉して來た。今や世界的文明の根本思潮たる精神生命そのものも

進んで之れを取るの外ないのである。滿洲の經營に當るもの此世界的文明の根本原理に逆行する時は其前途は唯だ閉塞せらるゝのみである。若しも日本にして滿洲より手を引かねばならぬ場合あらんか、其時こそ我日本は實に絶望の危機に瀕するもの、滿洲に於ける我民族の真正の意味に於ける發展如何は日本將來の運命を卜すべき試金石である。若し吾等の衷なる此理想と信仰とが國民の間に生じて來れば、我民族は此世界的經營に參することが出来る。然らずして此の根本原理を會得せずんば、我が滿洲經營の將來は悲觀の雪に掩はれざるを得ない。

余は信ずる、日本人が眞に東洋の覇者として大義を世界に布かんとすれば、日本人は眞個の士君子として立たねばならぬ。換言すれば新しき武士とならねばならぬ。而して之れ亦實に滿洲に於て支那人をして悦服せしめ尊敬せしむる所以である。若しも日本人が清く高き武士の風格を持して彼等に對するに於ては、彼等は必ずや我を尊敬し、我に信賴するであらう。然らずして所謂農工商者として彼等と輸贏を争ひ黄白を算するを以て能事終れりとするならば、日本人は滿洲經營に參するの資格はない。

斯くては何等東洋の進運に貢獻する能はざるのみならず、却つて彼等の侮蔑を買ひ、惹いては日本の世界に於ける威信を墮すに至るは火を賭るよりも明かである。吾人が日本人の滿洲に行く者に向つて士君子の自覺を要求し、基督の精神を要望する、其眞意や實に茲に存するのである。

精神界の新紀元

紀元節は我が國礎設定の記念日として我國民の永久に祝すべき大祭日である。然して我等クリスチャンが之を祝するに當りては、そこに在來の國民が之を祝するよりもヨリ以上の深遠なる意義あるを思はざるを得ない。恭しく我國體の淵源を稽ふるに神武の東征は即ち天孫人種てふ優等民族が、西方より我國に來り、土族の劣等民族を征服して、其精力を得はじめしに歸因するのである。神武天皇が九州の一角に表はれ給ひし時は、我國には獨り蝦夷人のみならず、土蜘蛛其他種々の民族が各地に割據し、互に吞噬をこゝしてをつた。神武天皇は其一族郎黨を率ゐて東上し、是等の諸民族

を征服したるのみならず、之を慰撫し、彼等を統一して其指導者となり、茲に中國平定の大業を完成し、大和の橿原宮にて日本皇帝として八州に君臨し給ふたのである。之れ即ち吾等が今日祝するところの紀元節にして、一言にして云へば神武天皇の鴻業は優等民族が劣等民族を征服し、其上に立つて指導者たるの地位を獲得したるもの、紀元節は其の大業完成の記念日なのである。然るに夫より二千五百有餘年天祐は常に我國民の上であり、我日本民族は隆々として發展し、日本國內の統一のみならず、南は臺灣より北は樺太を領し、更に朝鮮を併合し今や實に大陸にまで發展して居る。我國祖は其始めは大陸から來たのであらうが、今や其位地を轉倒し大陸に向つて發展しつゝあるのである。

基督教の我國に傳來するに至りし當時の有様を稽ふれば實に深き意義がある。我國には古來多くの宗教があつた。神道と云ふ名の下に幾種の宗教があり、又中古に於いて支那朝鮮を経て傳來したる各派の佛教があつた。之れに加ふるに彼の儒教あつて、宗教の形式によらざるも然も一種の權威を以て知識階級を支配し、教化の任に當つて

をつた。其外諸種の宗教的團體ありて夫れ々々悔るべからざる勢力を以て人心を支配して居つた。斯く宗教の鬱然たる所に我が基督教は入つて來たのであつた。然らば基督教は此中に入り來りて抑も何を成さんとするのであるか。基督教の我國に於ける状態は、抑も神武天皇の一族が九州より東上して幾多の土族を平定し、茲に日本國家の洪基を据ゑ、以て其經營に取りかゝりしが如きものであつて、基督教も多く宗教の存在せる中に入り來りて、之れを指導し統一し、此國土に於て精神的王國の基礎を固むるの使命を有するものである。在來の宗教が成し得ざりし前人未踏の新天新地を開拓せんとして此國民に臨みつゝあるものである。此意味に於て神武登極の紀元は我國の政治的紀元にして、吾等基督教は今や精神的新紀元を作りつゝあるものである。若しも基督教が我國の精神界に何等新しき貢獻を作す能はずんば基督教は我國に廣まるの必要はない。既に幾多の宗教の存在する所に基督教が割り込んで來る以上は、そこに何等かの使命があらねばならぬ。基督教は優等の宗教である、優等の宗教なるが故に彼等を啓發し指導する権利がある。茲に之れを宣傳する使命があるのである。クリスチ

ヤンは精神的に於て新なる人種であつて、此新人種は從來の人種を教化する使命を與へられた。彼等を根本的に覺醒せしめて精神的新紀元を畫するの特權を有するものである。是等の理由から吾等が紀元節を祝するには深き意義が存するのである。

更に面白いことは神武の鴻業が幾多の困難と妨害とに遭遇し、是等の難關を突破して、之れを完成された如く、我が基督教も亦宣教以來幾多の困難迫害に遭遇し、然も之れと戦ひて勇往邁進しつゝあることである。吾等の事業は未だ功半ばにして其前途は實に遠遠である。此邊の消息を考ふる時、紀元節が吾々に與ふる感慨は眞に深きものなるを感ぜざるを得ない。然らば吾等は如何にして其の使命を完成し、精神界の新紀元を作ることを得べきであらうか。其一つは日本の歴史に意義を與ふることである。抑も我國建國二千五百年の歴史は眞に意味ある所のものである。吾等クリスチャンの眼を以て見れば此中には從來知る事の出来なかつた深き意義があるのである。日本在來の歴史は吾等クリスチャンには甚だ物足りない、之にはもつと／＼深奥なる意義が含蓄されてあるのである。我國民は口を開けば「天祐」を叫ぶのであるが我國に加へ給

へる皇天の加護は所謂「天祐神助」の一句にて其の意義内容を表明することは出来ない。之れば天地の神、人類の神、歴史の神、換言すれば萬國を統べ宇宙を率ゐ給ふ唯一の神を信する信仰の眼を以て見、其精神を以て解釋するにあらざれば眞の意義の發揮することは出来ないのである。此意味に於て日本の歴史はクリスチャンが書かねばならぬ譯合の事である。クリスチャンの云ふ所の「天祐」なる字義は深遠雄大にして、實に天地の神より流れ出する力の活動を指すのである。而して天祐ある民族とは其神の力の指導によつて、向上發展する選ばれたる民族を云ふのである。斯る民族の歴史を編むものは、其神を敬ひ其神の力を信する所のものでなければならぬ。例へば彼のイスラエル民族の歴史を書きたる舊約記者の如きは即ち夫れである。舊約書は世界人類の最も尊むべき歴史的寶典である。而して彼等舊約記者は神を信する敬虔なる人であつた。之れ舊聖書が一個の歴史としてよりも、寧ろ生命の書として世界人類に尊重さるゝ所以である。日本民族の歴史に於ても然かあらねばならぬ。即ち日本民族の紀元をなしたる二千載の歴史は此見地にたつて書かれねばならぬ所の尊いものであ

る。日本民族史の上に此光榮ある意義を見出さざる以上、日本歴史は單なる治亂興敗の記録に過ぎないのである。而して之れに光輝を與ふるものは實に吾等のクリスチャンである。

更に今一の使命は信仰の統一と云ふ事である。我國には古來一種の信仰があつた。夫れは佛敎の渡來以前、儒敎の渡來以前より既に國民の心に根柢を下ろし、我民族の心を支配してをつた。夫れは即ち二種の多神敎であつて、所謂八百萬の神である。之れは一面より見れば宗敎發達の初期に於ける状態であつて、寧ろ佛敎、儒敎などよりも素樸なる處に取るべきものがないでもない。乍併夫れはめい／＼がち／＼にして、何等の統一もなければ、主義もない。然るに吾等クリスチャンは天地の根源なる唯一の神を信するものである。日本の神であり、萬國の神であり、又宇宙の神である主宰者を信するものである。此信仰をして日本民族のものとならしむるは、即ち國民をして永久の幸福を享樂せしめ、國家をして確固不動の基礎の上に立しむる所以である。クリスチャンは八百萬神の信仰者に向つて、百尺竿頭一步を進めて、其根元なる唯一

神の信仰に入らしむるの使命を有するものである。

最後は基督教の最も重大なる使命は其博愛主義の普及である。基督教は國家が門戸を閉ざして、海外と交通を杜絶する場合には到底之れを宣傳することは出来ない。之れ即ち我國鎖國攘夷の當時斯敎が非常なる困難に遭遇したる理由である。然るに國家にして一度開國進取の態度を取るに於ては、基督教も亦歡迎せられざるを得ない。基督教は恰もよし、此開國の機運に乗じて廣まつて來た。彼の尊王攘夷論が一變して尊王開國説となるに至りしは、内外の情勢已む能はざるものありしとは云へ、一面日本人の已むにやまれぬ精神の勃發し來りしものにて、此精神は之を外にしては開國進取となり之れを内にしては四民平等の思想となつた。然して之れ實に明治の文明を生みたる根本原因である。基督教の思想は開國進取の思想と共鳴し、四民平等の思想と共鳴する、否基督教の根本思想そのものが、平等主義、進取主義である。此機運に基督教が乗じて來たのは當さに然るべき所である。然るに今日は如何なる時代かと云ふに、現代は更に一步を進めて萬國主義、博愛主義の時代となつて來た。明治維新の時代は

一言にして云へば輸入時代であつた。故に此時代に於ける開國主義は眞に時宜に應へるものにして「開國進取」の一句は之れ即ち當時の福音であつたのである。然るに今や我國は空前の大發展をなして世界に進展しつゝあるのである。完きもの来る時は完からざるものは廢る。我國民の思想は長足の進歩をなし、開國進取、四民平等の思想の如きは最早國民の心裡に深き感興を起さざるまでに舊式の言語となり了つたのである。我同胞は今や北米合衆國にも永住の居を卜し、滿洲蒙古にも不動の根據を据ゑつつある。而して南亞米利加印度南洋にも發展せんとしつゝあるのである。されば今日日本民族は狹隘なる國家主義や利己的忠君愛國では之を指導することの出来ない時代に遭遇しつゝあるのである。此時に於ける我國民の覺悟は世界を我家とし、人類を同胞とする精神の飛躍する事である。萬國を友とする人類同胞の大義に生きることである。之によらずんば深い意義の博愛主義は發揮せられない。明治時代のモットーは開國進取であつた。大正時代の標語は實に博愛協力の大義である。然るに現代に於て基督教程博愛協力を高調するものはない。此博愛協力主義は實に基督教の精髓にして、

基督教は之を發揮せんとして遺憾なく發揮し得ざりし所に、沈痛なる苦悶を重ねたるものである。我國の基督教も唯此の一點にて最も痛烈なる困難を嘗め來つた。偏狭なる國家主義と基督教との衝突は即ち此一點に存せしものにして、曩頃物故せる加藤弘之博士が晩年の事業は此世界的思潮に向つて一大反抗を試みることであつたのである。博士は渾身の熱血を揮つて口に筆に國家の存在と博愛の協力主義との矛盾を提唱したけれども、事實は之に何等かの解決を與へざれば、到底國民の永久的發展を見る能はざらしめんとしてあるのである。然り此博愛主義、人類同胞主義を取つて我國是とするか否かは、實に日本帝國將來の安危を卜すべき重大なる問題となつたのである。予は日本が萬國同胞主義、博愛協力主義を取るにあらざれば、日本國民は斷じて世界の表面に濶歩することは出来ないと思ふ。此の博愛的、萬國的思想を徹底的に養成するは實に基督教徒のみが負へる一大使命である。

然るに翻つて我國精神界の状態を見れば、今尙ほ一種の固陋なる保守的思想ありて我等の主張を妨げ、國運の進展を妨害せんとするものが少くない。而して彼等は基督

教とし云へば其の真相を窺知せずして、直に之れを夷狄外來の宗教となし、日本國民の精神とは全然沒交渉のものと見るのである。而して我國民性は舶來の宗教を以てしては、涵養する能はざる一種獨特のものであると云ふのである。勿論我國には我國民固有の精神が有る。乍併過去他國と交渉なき國內のみたて事足りたる時代ならばいざ知らず、現代の如く海には一萬噸、二萬噸の汽船を浮べ陸には一日數百哩を馳する汽車を構へ、無線電信を以て幾千哩を通信する運輸交通の發達せし時代に於ては、此精神の國是は正に一大革新をなさねばならぬ所のものである。切言すれば基督教こそ實に我國民の中に潜める偉大なる精神をして、現代世界に適應せしむべきものたらしむる使命を有するものである。基督教を措いては我國民精神をして眞に現代的意義あらしむる宗教はない。基督が「律法と豫言者を廢つるために來れりと思ふ勿れ、わが來るには之れを舍つるにあらず、之れを成就せんがためなり」とは實に諸宗教に對する基督教の態度である。基督教を以て輸入の宗教なるが故に我國民を教化すべからず、若し我國人にして基督教を信するものあらば、そは西洋宗教の模倣にして、其の生命

となり血となることは出來まいと云ふ者が少くないが、之れ實に思はざるも甚しきものである。成程基督教も儒佛諸教と同じく輸入教であつた。乍併宗教の外形、例令は會堂や儀式の如きは模倣も出來るが、宗教的真理其物の獲得は模倣にて出來る所のものでない。他の物質文明は殆んど之れを模倣によりて設定することが出来る。乍併宗教的真理は斷じて模倣を許さない。否論者の云ふ如く模倣的宗教には生命はない。宗教のみが唯一の獨創的事實である。會堂や儀式は模倣とも云へるであらう。然も信仰は吾等各自の内心の獨創である。宇宙の根本たる神より喚發せられたるもの、神と我との外何物の介在を許さざる本質的精神の叫び其ものである。偶像の崇拜は模倣でも行ける、其點に於て彼のお寺詣り神社崇敬の如きは模倣的宗教と云ふべきである。乍併基督教の二大本義たる、心を盡し、精神を盡し、意を盡して主たる神を愛するてふ事實や、己の如く隣を愛するてふ事實は、之れ即ち人心が神を認めたるより生ずる自然の要求にして、決して模倣を以て到達すること能はざる境である。吾等基督教徒の信仰を以て模倣なるが故に生命なしと云ふが如きは、信仰の何たるを解せざる皮相淺

薄の見解である。

論じて茲に至れば予がクリスチャンを以て我國に於ける新しき人種なりと云ふ意義が自から解せらるゝであらうと思ふ。吾々クリスチャンの中には、日本人の精神の奥底に秘められたる未發の精神が油然として湧き出でつゝある。恰も地中深く流れゝて未だ地上に湧き上りしことなき靈泉が一朝人力によりて掘り出され滾々として迸出するが如きものである。此二千有餘年の間深く秘藏せられたる前人未發の力を喚發せしものが、即ちクリスチャンの精神状態であつて、之れは模倣でなく、實に獨創である。此力は神の力が人間の心の奥深き處を通つて働いて來る所のものであつて、基督教に於ては之れを聖靈と云ふのである。斯くの如き一種特別なる精神状態が吾等クリスチャンの心内に實驗されつゝある。之れは日本人として全く新しき經驗であつて、基督によらざる以上、他の如何なる宗教も之れを與ふることは出來ない。此意味に於てクリスチャンは一種新しき人種と云ふべきである。而して此精神の中には上來述べ來りたる今後の日本人になる可らざる種々の必須的要素が含蓄せられてをるのである。

此上に日本精神界の新紀元を樹てねばならぬ。精神界の新しき紀元は外より與へらるゝにあらず、内より發せられねばならぬ。基督教を宣傳するは新しき人種を創造するの謂ひにして新人種の誕生は新しき紀元を樹つる所以である。クリスチャンの心中に此新人の誕生を見るは眞に驚くべき奇蹟であつて、實に之れ神夫れ自身の事業である。クリスチャンが此尊むべき偉大なる事業を自覺して神と偕に奮闘努力するに於ては、彼等は必ずや其目的を達し、茲に精神界の紀元を始め後世子孫をして、仰いで父祖の鴻業を神に感謝せしむるに至るであらう。而して茲に始めて日本の歴史は燦然たる光輝を發し、選民の史實として神の攝理を記す生命の書として、後世に尊重せらるゝ處となるであらう。斯くてこそ建國二千五百年の歴史も大なる意義を發揮して來るのである。

愛國心の聖化

基督は精神界の事象を以て隠れたるものとして示し給ふた。其一は畑の中に隠れた

る實の比喩である。畑中の實は外より見んと欲しても見る事は能はざる土を以て被ふはれたものである。即ち皮相の觀察によれば草萌え、小麦の生えたる畑に外ならぬ、夫れ以上の事は分らないのである。然るに直覺の力ある者は其中に奥深く秘められしものを見出すのである。夫れは畑よりも又畑に生えたる小麦よりも尊いものである。其實とは即福音の眞理にして人は皮相に拘泥せず其奥底ある實に注意すべきである。又彼の麩酵の比喩も此の意義を示すものである。麥粉と麩酵とは一見同様であつて肉眼にては見分けられない。然るに其中に不思議の力あり、之れを焼く時は麩酵は作用をなして非常な膨脹をなすのである。此力は目に見えざる力である。又芥種の比喩の如きも同様であつて其中に秘められし力は眞に驚くべきである。即ち少なき芥種子も之れを地に播くや芽を出し成長の後空の鳥を宿すに至る。之れ亦一種の見えざる力である、其力は如何なるものぞ、是即ち生命の力である。

斯の如く精神界の事も亦外からは見えない少さい力であるが、夫れが段々發展する時は世界を動かす一大動力となるのである。其不思議なる力を直覺せし基督の眼識は

眞に萬世の驚異である。之れを見出す時に人生は樂天的となる。此力を知らぬ者は悲觀せざるを得ない。此不思議なる力は基督に觸れて初めて發して來るのである。吾等の實驗によれば吾等の衷に隠れたる力そのもの、中に愛國の精神がある。此の愛國の精神は極めて隱微のものであつて、其の外に表はれてをる所は皮相なる一面である。人の心中には何とも云へぬ深いものがある。如何ともする能はざる深い力がある。此奥深き力は決して他と同化することが出來ない位、各民族特有のものである。近代は交通の發達に伴ひ各國益々歸化人を多くしたのであるが、彼等に取去る能はざるものは祖國を懷ふの情である。此點に於て之れは天性とも云ふべきものであらう。而して之れは何れの國人にもあるのである。

此の一種奥深き精神夫れは何から出で來りしものか、知ることが出來ない。唯吾等の衷なる秘れし力と云ふ外はないのである。此力を喚起したのはイエス、キリストである。淺薄なる考へを有するものは基督の精神は寧ろ其力を破壊するものとし、基督敎と國家主義とは氷炭相容れざるものとなすのであるが、基督敎が此の精神にヨリ深

き根柢を與ふるものなるを知らないのである。彼の五百年前の七月六日コンスタンヌに於て、異端の汚名の下に火刑に處せられたるヨハン、フスの如き其一例である。彼はボヘミヤ人で進歩的基督教の代表者であるが、彼の精神の中には誠に清く深く美しき愛國の精神が燃えてをつた。彼が火刑に處せられたのも其一は祖國ボヘミヤを思ふの精神熱烈にして人民より無限の渴仰を受け、其勢力の偉大なりしがため、痛く獨逸民族の忌む處となつたからである。然り彼の胸中に鬱勃たるものは祖國的精神であつた。彼はブラーグのベツレヘム教會に於て母國語を以て説教した。當時はラテン語にて説教するのが規則であつたが、彼がボヘミヤ語にて愛國の至情を吐露するや國民は著しく感動し、恰も燎原の火の勢を以て一世を風靡したのである。此フスの憂國の精神は基督の精神によつて喚起されしは云ふまでもない。彼のプロテスタント教の勃興は一面實に愛國的精神の勃興を意味するものにて、國民的精神は此の基督教精神と相共鳴し、以心傳心の關係を以て盛に勃興し來つたのである。聖書に於て見るも本來世界的共通不偏の福音を高唱し頑強固陋なる思想を打破しながら、一面に於てはパウロ

の如く「我兄弟我骨肉のためならんには或はキリストより離れ沈淪に入るも我願ひ也」と叫んで、熱烈旺盛なる愛國的精神を發揮してをる。クリスチャン、パウロがパウロの事を書いて、羅馬書の血と肉とは九、十、十一の三章であると云つて居るが、吾等も確かに此處にパウロの精神生命が活躍せるを見るのである。左程まで熱烈に此一面が感ぜられたのは、實に基督の精神の感化である。

余が近頃切に感ずることはバルカン諸邦の勃興である。見よ彼のギリキ、ブルガリア、ルーマニア、セルビア、モンテネグロ等の諸邦は數百年前より土耳其の壓制の下に呻吟せる國柄であつた。然るに彼の慘酷なる回教主義とは如何としても俱に天を戴くことは忍ばれない。そこで虐殺又虐殺、有ゆる壓迫の中にあつて、猶ほ希望を失はず土耳其は何れに暴威を揮ふも之を根本的に滅亡せしむることは出来なかつた。彼等の精神は恰も種子の地下深く埋められたるが如く、表面には見えないが決して消失したのではなかつた生命は尙存してをつた。故に春陽來復する時は芽を吹いて來るのである。バルカン諸邦の國民は壓迫されて居る間は下に隠れてをつたが、此力強き精

神は決して消失したのではなかつたから、上の力が緩んで來ると非常なる勢を以て勃發して來たのである。之れは何がためであるか、云ふまでもなく基督教の感化によつて育てられし國民だからである。一度基督の精神に觸れし愛國の精神は決して亡ぶものでない。亡くなつて居るやうであるが、必ず再び表はれて來る。故に基督教を以て非國家主義と見るは淺薄皮相の見である。一千九百年の歴史は之れを明かに證明してをる。基督教的國民は亡びさんとして滅すことは出來ない、故に現代の世界は萬國共立の主義によらざれば其の平和を見ることは出來ない。何となれば他國を滅して一大帝國を作ることには到底不可能であるからである。吾人が唱ふる萬國主義は此の意味に於て高調されるのである。

此力は基督教の精神に涵養せられないなら滅決して夫れ程強く、且つ偉大なるものとはなり得ないのである。何となれば夫れは慾望の勢力のために墮落の淵に陥りやすいからである、此の道義的深奥なる根柢なき力は愛國心と雖も墮落せざるを得ない。如何に強烈なる愛國心と雖も慾情の力には克てぬからである。我同胞の愛國心の如き

そが一度勃發し來る時は實に壯烈無比の觀がある。試みに維新の志士を見よ、彼等は家を捨て妻子を捨て、皇國のためには浪人生活に入つて甘んじた、如何なる貧苦患難にも平然として之に對する處は實に儒夫をして起たしむるものである。然るに愛國の精神に觸るゝ時は品行方正素行端嚴なる士君子となることが出來るか云ふにさうでない。今日までの我が國の愛國者と云はるゝ人士は、多少の例外はあらんも、其素行の點に於いて殆んどいふに忍びない。彼等に倫理的男女關係を望むが如きは、寧ろ迂愚の笑ひを招く外はない。憂國の志士も此點に至れば依然たる田夫野人である。忠君愛國の本城たる軍人社會は如何。彼等の中酒癖なきものは百人に一人ではあるまいか彼れは軍人中の偉才であつたが不幸にして死んだと云ふ歎聲を聞く。何故ぞと聞けば大酒のためだと答ふる。年を問へば僅かに五十歳を超えたか超えぬかである。斯る例を吾等は幾度耳にするか分らぬ。何故に家を捨て妻子を捨つるの勇ある忠誠の士が、僅かに其一身の貞潔を保つことが出來ないか。何故に國家の干城たる軍人が自重攝生して、君國のため盡すことが出來ないか。之れ實に道義的に缺陷あるためである。倫

理的に根柢ある精神に結びつかざるためである。道義的に缺陷ある人は斷じて永久的でない。其一代は健全ならんも其子孫は羸弱にして、奮闘場裡の人たる能はざるは古今史實の證明する所である。平安朝の末路は如何、藤原氏の子孫は如何又彼の大開秀吉は如何、空前の大英雄の末路や眞に怜むべきではないか。國民に此弱點の存する間は如何に熱烈なる愛國心ありとも、其國民を救済し國家をして泰山の安きに置くことは出來ない。何人か己が國家を愛せざらん、眞に國家をして永遠の進歩發展をなさしむるものは外よりの力にあらずして、我衷より發する健全なる道義力に根柢する良心の喚發である。之れは即ち基督の精神、切言すれば活ける神を父として、神と父子有親の關係にある見えざる力に根ざす處のものである。不品行、不道德は神の許し給はざる處、否實に天地創造の神の經綸に反するものである。愛國者が其身を君國に捧げて而して酒色に耽る、彼等は平然として「吾々は一身を君に捧げたのであるから、之れ位は許して貰はねばならぬ」と云ふのである。然るに神に我精神を結びつけたるものは「吾々は一身を神に捧げたのであるから、之れ位は許して貰はねばならぬ」と云ふこ

とは斷じて良心の許さざる所である。其身を潔き活ける祭物となし神に捧げ、夫れを生れながらに有する愛國の至誠と結び付くるのである。之れをしも健全眞正なる愛國精神と云はずして何を云ふべきであらうか。

余は必ずしもバルカン諸邦の民族を優秀なものとは云はぬ。されど彼等にして内に不品行不道德なりしならば、外過去數百年の間土耳其古の虐政と相俟つて滅亡の運命に立至つた筈である。然るに彼等は健全にして勃興の氣運を示してをるのである。吾人は彼等の中に基督教生命の鬱勃たるものあり、神の前に品行純潔にして、臥薪嘗膽の祖國心を燃やしつゝあつたこと想見せざるを得ない。此祖國的精神が更に深く更に高き神を信するの精神に結ばる自覺——之れが吾々に自覺せらるるとき、如何に強大なる國家と雖も之れを亡ぼすこと能はず、之れを壓迫することも出來ない。之れ實に永久不動の國家である。而して茲に神の國の型が出現したのである。吾々が祖先傳來繼承し來たれる已むにやまれぬ愛國の情其ものを神の國を慕ふ清く深き道義力にて養ひ強め高め深めて行く時は、我國は斷じて外國の征服を受くる事はない。況んや壓迫を

や。彼等は寧ろ尊敬の念を以て好を求めて來るのである。

更に此愛國の精神と愛神の衷情との結びたる喜悅を思ふ。吾等は同郷の人を懐かしむるのである。私は柳川の人と云へば一種の懐かしさを感じるのである。然るに夫れに加へて同郷の人にして同じ唯一の神を信する人と聞く時其懐かしさは一段の深みを加ふるのである。同國、同君主の國民にして、更に同じ神の聖旨を旨とせる喜悅は之れを實驗するものにあらずんば之れを語ることは出來ない。此二つの心情の結合によれる精神の旺盛は唯だ吾等クリスチャンのみが實驗する處である。今日は單なる愛國心のみを以て日本の支配する事は困難である、何んとなれば朝鮮人に之れを獎勵することは出來ないからである。果して然らば何を以て彼等を同化せんとするか、或人は固より彼等に愛國心を説くは危険也、よろしく彼等は武を以て歴し、政を以て服すべしと云ふであらう、乍併之れ決して萬全の策でない、吾人は宜しく彼等に同じ希望同じ抱負、同じ目的を自覺せしめて俱に與に大日本の經營に當らねばならぬと思ふ。斷じて彼等を以て隸屬的關係に置くべからず。果して然らば何を以て此日鮮一體の大

理想を實現せんとするか。夫れは上來述べたる神を愛する道義的精神に根ざせる大日本經營に對する愛國心である。茲に至れば彼等鮮人と雖も同情同感になり得るのである。此の精神に向つて共鳴せざる鮮人は恐くあるまいと思ふ。

余は朝鮮に行く事僅かに前後四回である。而して夫れも長くして二週間を出でたことではない。然るに恐らく我程朝鮮人の中に親しき友を有し、従つて精神的理解を有する者は澤山あるまいと思ふ。之れは決して自慢するのではない。十年在鮮の人にも或は二十年在鮮する者にも理解を持つて居るものは少なからう。之れは何が故であるか。云ふまでもなく隠れたる衷なる力を以て相對し、互に相共鳴するからである。此精神によりて肝膽相照す時、最早日鮮の懸隔はない、我には既に日鮮一體の實が表はれてゐるのである。此の一種隱微の力は即ち基督の賜物である。若し之れを排斥し單なる愛國心を以て彼れ等に望まなか彼等も又祖國心ある以上、水と油との如く永遠に一體となることは出來ないのである。さればとて愛國心は決して國民の腦裡より取り去ることは出來ない。之れは恰かも抜き去る能はざる草の如きもので如何に截除することも

直ちに芽を生じて來るのである。然るに活ける天地の神を信ずるの信仰に入る時は神は父なれば之れを拜するものは凡ての懸隔を超越して、同じく之れ兄弟であり姉妹である。同根一體となるのである。そこから相互の愛國心を融化して行く時彼等も斷じて不服を唱へないのである。而して此精神は獨り日鮮のみならず、日支を融合するものである。否實に全世界を融和して、神の國を地上に持ち來すところのものである。予は此の精神と信仰なくんば發奮して米國に行くの勇氣はない。我を招きたる人々の意志も亦必ずそこにあるであらう。予は此の國民的にして然も世界的なる精神は今後の世界各國が行くべき道であると信ずる。

神國の市民

使徒パウロの時代には二の國民が、一大自覺と權威とを以て存在して居つた。一は羅馬人、一は猶太人である。羅馬人は其當時世界の征服者として最も其權威を恣にして居つた。羅馬以外の民族は國民たる資格を失ひ、國民たる權威も特色もなくなつて

をつた。彼等は浮浪の民、即ちパウロの所謂、旅人、宿れる者である。彼等は被征服者であつて、羅馬にありて羅馬人たる能ざる眞に怜れむべき一種の奴隸的境遇にあつたのである。世に亡國の民ほど哀れなる者はない。例へば彼のアルメニア人である。彼等は土耳其の配下にあれど土耳其人たる能はず、さりとして其母國たるアルメニアは再び之れを建つる事は出來ない。茲に於て彼等は浮浪の民たらざるを得ない。喪家の犬とは眞に彼等の境遇であらう。故に其性格は自から荒み其品性は日に／＼墮落し、惡しき意味に於ける世界の孤兒となつたのである。而して其結果は自から世を狭め、孤獨の天地に踟躕するに至つたのである。彼のポーランド民族の如き亦此例に洩れない。彼等の國は露、奥、獨に分割せられて、彼等民族は各々夫等の邦國に屬してをるのであるが、彼等の心理状態も畢竟一個の國家的孤兒であつて、眞に其屬邦に向つて忠勤を擯んすることは出來ないのである。

其の如く羅馬帝國には亡國の民が多かつた。従つて彼等の品性も寔に下劣にして、其境遇が奴隸なる如く、其精神も亦遺憾なく奴隸根性を發揮してをつたのである。其

中にありて猶太人は獨特の思想と確固たる信念と、高潔なる品性を以て嶄然頭角を表はしてをつた。故に多くの人々の願ひは此「猶太人となりたい」と云ふ事であつたのである。猶太人には實に讚歎すべき特長があつた。一面より見れば彼等も亦怜むべき被征服者である、されど彼等の宗教道徳及び其確信は羅馬人も及ばざる高尚遠大なるものであつた、此點に於て彼等は被征服者にして然も征服者の上にあつた。彼れ等は此雄大なる抱負と確固たる信仰とを以て帝國を教化せんがために奮闘したのである。其の意氣や眞に盛なるものであつた。故に當時羅馬帝國に在留する人々の中には猶太人になりたいたと希つたものは、決して少くなかつたのである。又羅馬人は政治上に於いて特別な權威を以て他の人民に臨み、一種の誇りを以て、自由に街頭を横行活歩してをつた。故に多くの人々の中には「羅馬人になりたい」との、切實なる願望があつたのである。彼等の或者は金品を以て羅馬人たるの市民権を購ひ、或は功勞によつて之れを贏ち得んとして忠勤を擢んずる者があつた。以て如何に羅馬に於て市民権を有せざるもの、怜むべき状態にありしかを想像することが出来るのである。

斯る間に基督教は果して何を主張したのであらうか。彼等に羅馬人たれど主張したか、將又猶太人たれど主張したのであるか。否々「汝等は神國の市民となれ、宜しく神の國を我物とせよ」と云ふ處の雄大なる福音の眞理を宣傳したのである。此福音は羅馬人たり、猶太人たるの別はない。否實に浮浪者たり、奴隸たる者も亦此の神國の民たるを得ると主張し、市民権を有せざる悲しむべき境涯にあるものを招致して、神國の市民たれど高唱したのである。然るに彼等は此主張をなすに際し其地上に於ける市民権を輕視し此世に屬する彼等の特權を擯斥して、羅馬人猶太人を罵り獨り自ら高うして神國の市民たるべきを高調したかと云ふに、決してさうでない。兎角人間は偏しやすいものである。我最も尊しと自覺する時は、必ずや他を以て取るに足らずとなし、之れを輕視するは人心の弱點である。若し此際彼等にして神國の市民たらんものは、其羅馬人たり、猶太人たる資格を捨てねばならぬ、況んや其他の浮浪、亡國の民をやと主張したならば、基督教は到底その目的としたる神の國を地上に建設することは出来なかつたのである。彼等は地上の市民権を尊重しながら、尙國賊、非國民

てふ厭ふべき罪名の下に獄中に呻吟せねばならなかつたのである。此の誤解は初代基督教以來、今日に至るまで或る地方には存してをる。而して動もすれば國賊非國民てふ汚名を以て迫害せらるゝのである。遮莫、使徒パウロは如何なる識見を以て世界人類を率ゐて、神國の市民たらしめんと奮闘したのであらうか。

彼は猶太人であつた。而して彼は猶太人たることを卑しむべきこと、思はず寧ろ其猶太人たる事に一種の誇を以てをつた。彼が千人の長の前にて、其訊問に對して答へたる所を見れば、之れを知ることが出来る。彼は何處までもへブル人より生れたるへブル人なりと揚言して、猶太國民を以て任じ、猶太の國民性を有することを光榮として居つた。而して彼は其同胞國民のためには、基督より離れ地獄の火に投せらるゝも我願なりと云ふ、燃ゆるが如き愛國心を持つてをつたのである。彼は何故に斯く猶太民族を愛したのであらうか。抑イスラエル民族は其祖先の中に多くの偉大なる人格を有してをる。其歴史は最も美しき選民の記録である。而して其民族其もの、使命は遠大にして高尚である。之れ即ち彼が屬する國彼が連なる民である。さればこそ其同胞

國民のためならば如何なる患難も意としないと云つたのであらう。パウロは猶太人中の猶太人とも云ふべきパリサイの家に生れた。パリサイは實にユダヤに於けるビュリタンである。故に彼は猶太人本來の品格に於て秋毫も缺くるところはなかつたのである。律法にかけては實に立派な人間であつた。然り猶太人として模範的のものであつた。されば彼は其猶太國民としてうけたる國恩、其歴史的感化の如何に大なるかを思ふてはかの如き愛國的義氣を喚發せずにはゐられなかつたのであらう。

然るに此の猶太人なる事に無限の誇と光榮とを感じるパウロが、猶太人のためには不俱戴天の仇敵たる羅馬帝國に對しては果して如何なる態度を持つてをつたのであらうか。パウロは羅馬人たることを光榮としてをつた。彼は千人の長に向つて云ふ様「我はキリキアのタルソに生れし者にして、卑しき町の民にあらず」と。キリキアは羅馬の所領にして。タルソは其首府であつた。而して此都は大學の設けあり、當時文學思想の淵府として、希臘のアテニス埃及のアレキサンドリアと並稱せられたる處であつた。否或方面に於ては寧ろ二都に優るものがあつたのである。故に此府より有名なる

學者が少からず輩出してをつた。パウロは斯る光榮ある都府に生れたるのである。彼は此地の嚴格なる猶太人の家に生れ、純潔なる空氣の中に人となつた。彼はタルソの大學に學んだか、どうか今日審かでないが、此地に於て希臘語を學んだことは確かである。彼の希臘語は純粹の希臘語でなくヘブルの語脈が多かつたと云ふことであれば彼は多分大學に學んだものではなからう。乍併彼は當時羅馬帝國の風靡したヘレニズムの感化をうけてをつた。彼が「我は卑し町の民にあらず」と云ふ所には又大なる意味がある。何處の都會にも二つの方面がある。一は純潔にして高尚なる市民と、一は腐敗墮落せる方面である。而して文學技藝發達せる都會は、兎角華美浮薄に流れやすいものであるが、彼は其善感化をうけて文化の弊害を受くることがなかつた。之れ彼が其故國を誇り其家庭を誇る所以である。

斯く彼は羅馬帝國の清純なる空氣の中に育ち高尚なる精神的感化をうけてをつた。然るに當時の羅馬帝國の首都たる羅馬は腐敗墮落の極に達し、貴族は奴隸を壓制し、生殺與奪の權一に彼等の掌中に入り、彼等は專横、壓迫、虛榮、華奢、放蕩、淫逸、

有りとある惡徳を敢てして毫も意としなかつた。勿論中にはケートの如き高潔なる義人もあれば、セネカの如き卓邁なる學者もあり、又マーカス・アウレリユスの如き名君もないではなかつた。又婦人社會を見ても、彼のグラツクカスの母の如く、又ケートの妻の如く、賢明なる婦人なきにしもあらねど、一般の婦人に於ては、貞潔の徳は殆んど失はれ、「夫を替ゆるは領事の代るよりも繁し」と云つた程に腐敗してをつた。換言すれば當時の羅馬は敗徳亂行の四字に盡きてをると云ふも決して過言でなかつたのである。パウロにして若し斯る方面にのみ目を注いで、その惡風を受けて居つたならば、決して羅馬人たるを誇りとはしなかつたであらう。然るに彼は遠がに羅馬の醜穢なる一面にその眼を奪はれず、そが善なる方面、美なる方面の感化を受けた。加之當時の羅馬帝國は唯一の世界的大帝國で、文學者と云はず、哲學者と云はず、凡ての穎才は羅馬に聚り其間には自から雄大なる精神の磅礴たるものがあつた。パウロの心を打つたものは此の世界的精神氣魄であつたのである。彼が何處に於ても其都府の中樞的高尙なる精神に觸れ、此處を牙城として其民衆の教化に當つたのは實に彼の識見の

高邁なるを表すものである。

試みに羅馬の法律を見よ、羅馬法は現代世界に於ける法の淵源であつて、法を學ばんもの何人も茲に溯らざれば其眞義に徹底することは出来ないのである。殊に其の四民の平等を唱破したる處などは眞に卓見と云はねばならぬ。當時法律の恩恵は奴隸には及ばなかつたが苟も羅馬の市民權を有するものは平等の權利を享樂したのである。吾等は二千年の往古に於て、此偉大なる思想が法治の上に實現せられたるを見て驚歎せざるを得ない。是等を見てもパウロが羅馬帝國に向つて深き感銘を有し、其隆盛を望んでをつたことは察するに難くない。故に彼は深く羅馬の市民權を有するを光榮とし、忠實に國法を守り、且つ自から之れを守れるのみならず、當時の羅馬帝國に於ける基督教徒をして之れを守らしめ、其愛國の至誠を發揚せしめんと力めた。彼の羅馬書十三章は、羅馬人其もの聲にして、決して異邦人の聲ではない。曰く「上にありて權を持てるものに凡て人々服ふべし。そは神より出でざる權なく凡そある處の權は神の立て給ふ所なれば也、是故に權に悖ふ者は神の定めに逆く也。逆く者は自から其

審判を受くべし。有司は善行の畏れにあらず、惡行の畏なり、爾權を畏れざることを欲ふか。唯だ善を行へ、さらば彼より褒れを得ん彼は爾を益せんために神の僕なれば惡を行ふ者に怒を以て報ゆる者也。故に良心によりて之れに服ふべし云々」。如何にパウロが羅馬の皇帝に尊敬を拂ひ、忠實に市民たるの分を盡したかは、明かに茲に語られてをる。彼は斯くの如く帝國の擁護者として福音を宣傳したのであつた。而して彼が一面人道の大義を主張し、人格の尊嚴を主張し、風紀振肅のために骨折つた其の偉大なる努力は之れを政府當局より見るも、國家のため眞に尊敬すべきものであつたのである。

然らば斯くも羅馬帝國に對して忠實なりし彼は、其母國たる猶太に對しては國民たるの威嚴を汚し、其資格を失つたであらうか。さうでない、彼は祖先の律法を嚴守し神に仕ふる事に於て一點も缺くる所はなかつた。此點に於て彼は忠良なる羅馬人たると同時に、敬虔なる猶太人であつて、此正反對に見ゆるが如き二個の資格は、パウロに於て渾然融合してをつたのである。此の兩極端の資格は議論に於ては決して一致す

るものでない。然も大なる人格の生活には遺憾なくそれを實現し得るのである。されば此の一境は議論のよく解決する處にあらすして、實に生活其ものゝ上に體現すべきものであると信ずる。乍併パウロの本領は其處にはなかつた。彼は猶太又は羅馬の市民たるに満足せず、更に高く更に尊きものを經驗してをつた。夫は即ち神國の市民と云ふことである。基督が此世に來り給ふたのは人をして此神國の市民たらしめんがためである。而して又之れがパウロの最も力を注いで深く味ひ得る處のものである。此神國の市民の資格はそも如何なる處に存するのであらうか。夫れは此世の國よりも更に深く且廣いものである。彼は猶太人たると同時に羅馬人であつた。之れ即ち猶太は羅馬帝國の中にあるからである。大なる圓の中に小なる圓は存し得るのである。恰も其如く神國は無限大なる圓にして、猶太も羅馬も其中に包含さるゝのである。此の無限大なる神の國を獲待する時は、凡ての國は其中に活躍して來るのである。しかして神の國は又目に見えざる靈の國であるから、無限大であると同時に、小なる器に入つて束縛せられない。故に神國は宇宙の大よりも大なれど、然も羅馬帝國の中にも打ち

立てるのである。恰も吾等の靈は大なれど、五尺の身體にをさまり、而して其靈が吾等の外にありて考へ、思ひ、憧がるゝ時は、吾等の身體と靈とは殆んど天地との差を生ずると同様である。身體にして然り國家にして然らんや。故に神の國は羅馬帝國の隅より隅に入り國中に行き渡つたのである。

此神の國の基は即ち神である、其神は天地の中にあり、天地を貫き、天地を治しめす方で、其の神の治めす國が即ち神の國である。斯く云へば凡眼には神の國と羅馬帝國とは畢竟衝突するを免れないと見ゆるであらうが、しかし之れに就ては名君マーカス・アウレリウスが遺憾なく喝破して居る。「羅馬皇帝は皇帝として羅馬の市民にして人として宇宙の市民である。吾々の願ふ處は神の中に入り、榮光の生活をなさんとすることである」と。此の神の國の市民たることは即ちパウロの主張する所であつたのである。其榮榮、其資格が、猶太の市民たり、羅馬帝國の市民たるより、更に高く更に尊きものたるは言を俟たない。吾等クリスチャンは此尊き神國の市民として生れたるものである。然して此國には洋の東西を論せず、國の文野を問はず、何人も之れに

入り得るのである。英人たり、米人たり、又日本人たり支那人たる其儘の身分を以て入る事が出来るのである。但しそこに一つの条件がある。夫れは即ち新しき生活に入ること、換言すれば新人となることである。是は實に意味ふかき處である。此處に入るには此教を信せよ、彼の儀式を守れと云ふのでない。神國の市民には地上の儀式、習慣、教義、信條はない。唯新しき人格として、舊人の穢れたる邪なる舊生活を捨てて新人の生活に飛躍せよと云ふのである。彼のニコデモの間ひに對して、基督の答へ給ひし「人若し新に生れずんば神の國に入るに能はず」との言は即ちそれである。故に此唯一の條件に應ふものは、猶太人も、希臘人も、羅馬人も之れに入ることが出来たのである。基督が此地上に來り給ひし目的は其教訓を傳ふるためでない。人をして新に生れしむる爲である。クリスチャニチーを基督教と譯したるは大なる間違ひである。クリスチャニチーは教でない。新人の生活、新しき生命、之れが即ちクリスチャニチーである。換言すれば舊精神舊生活に別れを告げたる心。神の潔く且善なるが如く我も亦潔く善ならんとする向上心。之れ即ちクリスチャニチーである。茲に基督教

の根本義がある。初代基督教徒が之れを獲得したるは眞に偉なりと云ふの外はない。

斯くの如き市民は猶太人として邪魔物であらうか。又羅馬人として邪魔物であらうか。否々斷じて然らず何れの國民としても立派なものである。決して其國民の人後に落ちざるのみならず、實に其國民の柱石として、一國の精神的中樞として國民指導の大任に當るべき資格あるものである。而して彼等には國民としての其國の習慣、風俗も夫れが神國の根本精神を矛盾せざるものなる限り、決して邪魔にならないのである。見よ基督はエルサレムの宮に於て禮拜をなし給ふたではないか。此の世の儀式禮法は地に屬けるものにして天に屬けるものではない。新人の本領はそこにないのである。故に國々の風習之れ決して咎むる必要はない。要は夫れに與るもの、内心の状態である。若し夫れが舊きまゝの人にして何等新生の自覺なくんば、神の國を去る事遠きものである。又反對に新生の實驗を得てをる人であるならば、地上の儀式慣例は何の咎むべき必要を見ないのである。

今や世界は未曾有の大戦亂中にある。乍併其戦争は如何に大なるものなるにもせよ。

夫れは畢竟國家と國家との勢力争ひである。故に歐米の識者は此戦を見て今多くの國民は互に鎬を別つて戦つてをるが、併し之れは決して人間の本領でない。人間の本領は然か淺薄悲惨なものではない。夫れは更に深處にある。吾々は義と和との行はるる神の國を望見し、人生も亦斯く成り得るとの確信を有するものであると云つて居る。彼等交戦國民は此主張を聞いて、國賊なり、非國民なりと云ふであらうか。否々然らず。英、佛、獨、露、皆之れを聞き、心中然り汝の言の如しと共鳴するのである。之れ實に偉大なる思想の發露と云はねばならぬ。然り之れ人間衷心の要求否實に人間の本領である。然るに我同胞の多くは不幸にして之が分らない。吾人にして斯の如き事を云はんか直ちに非國民賣國奴を以て之れを責むるのである。是を彼等國民に比すれば眞に雲泥の差ではあるまいか。今や歐洲の天地は戰雲酣にして人は戦争の悲惨と人性の殘忍なる有様を正視し、之れに覺醒すると同時に、「神國の市民」たることの光榮と幸福とを憧憬し、新生の必要を自覺しつゝあるのである、されば若し干戈收まり風雲舊に復するや、彼等は急轉直下の勢を以て驚くべき精神的の大飛躍をなすであら

う。斯く云へば或人は云はん。戰亂終熄後の歐洲の天地は層一層軍國的政策を取り、益々兵を養ひ軍器の整備に忙殺さるゝであらうか。迂も又甚しき哉。今回の戦争が戦争以上に何物をも齎らさず、此儘にして戦争前の状況を繰り返すものならば、世界は斯る多大の犠牲を拂つて一步も前進しないのである。唯だ進みたるは軍器戦術の進歩のみ。噫人類は進まずして器械のみ進歩するとせば、人類は人類の殺戮を謳歌する譯ではないか。人間は斯くまで無明にして不道理なものではない。過去の歴史は斷じて然らざるを示してをる。戦後の世界を目して軍國主義跳梁の時代となすものあらば、そは人類を進歩せざるものと前提せる、歴史を無視し人類を侮辱する者となさねばならぬ。果して然りとすれば人類は更に猛惡となり、其殘忍性は殆んど食人種のそれよりも甚しきものであらう。而して武器のみは無限に發達し、遂に戦争又戦争。その結果人類は絶滅するに至るより外はないのである。我國の軍國主義者は果して斯る瘡癩なる觀察をなして心中苦痛を感じないのであらうか。

吾人の見を以てすれば歐洲の天地は日は一日と「神國の市民」たるの自覺が各國民の

間に確實にせられつゝあると信じて疑はない。故に今回の戦亂を轉機として歐洲の天地は其法律の上に、其制度の上に、其教育の上に、其宗教の上に、其國際關係の上に、一大進歩を來すことを信じて疑はない。更に根本的に云へば人間本來の性質の上に、一大覺醒をなし、神國の理想を地上に實現せんとするものが、東西南北に起り彼等諸民族は翕然として之れに應ずるであらうと思ふ。之れ即ち予が常に唱ふる萬國主義、人道主義的世界經營である。予は彼の初代の基督教徒が第一世紀に高調したる『神の國の建設』が戦亂の終局の日より、歐米の識者宗教家によりて高調さるゝを信じて疑はないのである。我日本國民も此新天新地の大潮に後れを取らざるやう今より心掛けねばならぬ。今日の我國は世界の經營に參するを得るか否かの岐路に立つ。若し一部論者の如く、盛に軍備に熱中し、獨逸の過去の失敗政策を真似て、國民の心意を高潔にする事なく、徒らに強慾殘忍の邪心を鼓吹せんか。日本は世界の進運に後るゝ事正に百年なるべし。其の結果は何ぞ唯だ獨逸今回の徹を蹈むに止まらんや。故に若し我が國民が此神を信ずる心起らず、新に生まるゝの希望なく、神國の市民たるの自覺に

入ることなくんば、吾等は進んで世界の進運も何等貢獻する所もなく、一步自國の境界を踐み出さば我は旅人なり寄寓者なりとの卑しき又僻める氣分に驅られざるを得ないのであらう。然らざれば到る所の國、見る所の人を敵とせざるを得ないであらう。是何ぞ日本國民の行くべき道ならんや。實に之は帝國發展の障礙となるものはない。此障礙は内に燃ゆる神の靈に由らざれば斷じて排除することは不可能である。

極東の選民

爾曹は選ばれたる族、王なる祭司、聖民、神に屬するものなりとは使徒ペテロが羅馬帝國に於る基督信徒に向つて發したる獎勵の言葉である。此小なるクリスチャンの團體は羅馬帝國の大に比すれば眞に蒼海の一粟も雷ならざるものであつた。故に當時の歴史家の如き、何等之れに注意を拂はず、彼等が時代の歴史を編むに當りてや、毫も此の小團體に就て誌す所なかつたのである。否或者には之れが目についたには相違ないが、雲烟過眼、空寂の間に逸し去つたのである。然るに此團體の指導者たるべき

人は、之れに向つて何を教えたのであるか。それが即ち選ばれたる族、王なる祭司、神に屬けるものなりとの言である。之れ實に驚くべき、人の想像の出来ない資格を示したるものである。此の偉大なる思想は果して何に由つて勝ち得たのであらうか。一言にして云へば、彼等の信仰が彼等をして然か自覺せしめたのである。信仰は未だ見ざる所を眞理とす。彼等の目前の有様では到底斯う云ふ確信は起らないのであるが、信仰に依りてそこを見たのである。乍併此信仰は徒に發するものではない。茲には二つの大なる根柢がある。其一つは自己の衷に秘められたる一種の不思議なる力であつて、人間の良能とも云ふべき、尊く且つ善良なる能力である。之れを自覺する所に信仰が生ずる。今一つは此の善良なる力の根源が、單に我衷に秘められたるにあらずして、それは實に天地の活ける神に根ざし、其大源泉に發してをると云ふことである。斯く信する事の出来る所に、眞の信仰が生じ、所謂未だ見ざる所を眞理とするの確信を得るに至るのである。初代基督教徒は此の二の大なるものを自覺してをつた。自分の中に當時の人々の持つて居ない力を獲得してゐた。其力こそ自分を救ひ自分を幸福な

らしむるもの、然り其の力こそ源を天地に活ける神に發せるものなる事を、具さに實驗して居たのである。之れは形體の上に拘泥する者には誠に取るに足らぬ所のものであるが、其内容に着眼する人には眞に偉大なる將來を孕むものと見ゆるのである。恰もかの芥種が小なる一粒に過ぎざるも、其内には潑潑なる生命潜在し、そが一度地上に芽生し、雨露に培はれ太陽の力を受くるや、遂に生長して空の鳥を宿する至るが如きものである。その如く初代基督教徒の中には、衷なる力と之れを培ひ育つる神の力があつたのである。此衷なる生命と神の力との交感に眞に悔るべからざる所のものである。されば彼等が吾儕は選ばれたる民、神につけるものなりとの自覺と抱負とは空しからず、此小なる團體は遂に羅馬帝國をして其前に膝を屈せしめ、當時の史家をして此帝國こそ永遠不朽の國家なりと思はしめたる、大羅馬帝國は滅亡したけれども、基督教は年を追ふて隆盛を示すに至つた。否啻に羅馬大帝國のみならず、世界幾多の國々は徒らに興敗存亡の史實を貽すのみなるも、基督教は歲月と俱に益々發展して、國家を超越し民族を超越し萬古に一貫したる眞理を宣傳して渝らない。基督教二千載

の歴史は、常に其時代々々の歴史家には想像する能はざるものを産みつゝ、今日に至つたのである。

されど斯の如き思想はクリスチャンが初めて得たものではない。之れは昔イスラエル民族に向つて語つた豫言者の思想に根ざすのである。予は彼のイスラエル豫言者の言行を読み、且つイスラエル民族其物を見て殆んど其意義を解するに苦しんだのである。彼等民族の境遇と其中にある豫言者の聲とは如何に相違してをるか。殆んど霄壤の差がある。イスラエル民族は内に於ては幾度となく神意に背き、外に於ては屢隣國の壓迫を受け、亡國の姿となつた事は一再にして止らなかつた。此怜むべき民族に向つて、爾曹は選ばれたる族、王なる祭司、神に屬ける者なりと云ふ豫言者等は果して何の見る處あつて此言をなしたであらうか。何故に彼等は慷慨悲憤天地に號泣しなかつたであらうか。彼等と雖も天地に號泣し、幾度か悲憤の涙を飲んだ。乍併彼等の悲憤號泣は望みなき婦人の歎くが如き空しきものではなかつた。彼等には一種の希望があつたのである。現在の境遇は眞に慘憺たるものであるが、必ずや將來勃興し得るを

確信したのである、之即ち彼等が亡國の悲運を眼前に望み見ながら、猶かつ風厲卓發、爾曹は活ける神の選民なりと激勵したる、大なる動機である。果せる哉、彼等イスラエル民族は有ゆる逆境と戦ひ、難關を突破して勃興し來つた。勿論此の勃興たるや凡てのイスラエル民族が興つたのではない。民族中の精華、國民中の生命あるもの、みが鬱勃として起り來つたのである。換言すれば民族中の良知良能たる民族を成就し得るといふことが、豫言者の最も力を注いだ點である。此信仰は決して空しきものではなかつた。何となればイエス・キリストは實に此信仰の所産であるからである。豫言者の努力は他に何物の得る所なくとも、一人のイエス・キリストを生み出した事によりて酬いられて餘りあるのである。假令イスラエル民族は千九百年前に全く滅亡に歸し世界の表面に何物を残さずとも、一人の神人イエスを人類の救主として此の世に出したと云ふ事のみにて安んじて可なり。世界幾多の民族中何處にも彼等と光榮を争ふ民族はないのである。然るに此民族は今日猶ほ滅亡に歸せざるのみか、寧ろ滔々として世界の表面に發展しつつある。猶太人と云へば一種侮蔑の意味を存し、現に東歐羅巴

に於ては有らゆる虐待を受けつゝあるのであるが、彼等は毫も之に屈服せず、恰もかの山火事の如く、彼方を打消す中に此方に燃え擴がり、此方を撲滅すれば彼方に移るが如き觀がある。而して獨、佛、英、米の諸國に於ては、彼等は資本家の階級にも學者の階級にも一流二流の地位を占め、悔るべからざる地歩を形造りつゝあるは隠れもなき事實である。彼等が今猶豫言者の信仰を抱懐し、其豫言は必ず成就せらるべしと確信しつゝある状態は、眞に不思議と云ふ外はない。

由來將來を有する民族の中には一種の強烈なる信仰がある。今日地球上に國をなすものゝ中にも、斯くの如き信仰を以て國家社會を指導し激勵しつゝあるもの決して少くない。然らば吾等の屬する日本帝國は如何。我帝國は今日迄無意味に極東に存立して居つたのであらうか。之れには確かに深き意義があるに違いない。今民族の理想は暫く措いて論せず、過去に於ける歴史を顧れば吾等は之れを覺ることが出来る。試みに亞細亞の諸國を見よ、最近五十年の間に於て國てふ國は殆んど滅亡してしまつた。先づ西方より檢し來れば、土耳其帝國を初めとし、波斯、印度、安南、暹羅、縮甸、

皆之れ他國の配下であり、又あらんとしつゝあるものである。更に北して支那は如何朝鮮は如何。觀じ來れば亞細亞の諸大國は何れの國と雖も類々として亡國の方向に陥りつゝあるのである。而して茲に巍然として獨立の體面を保ちつゝあるは我日本帝國のみである。之れには何か譯がなければならぬ。他は五十年此方に衰亡し、我は五十年來勃興した。茲に考ふべき意義が伏在する。我國に於ては過去の歴史其ものに尊いものがある。新らしき日本は偶然にして出來たのではない。新日本は過去の日本の胎内にあつたので、明治維新を以て茲に呱呱の聲を擧げたのである。然も新日本の誕生は決して安産ではなかつた。實に難産であつて、非常なる骨折を以て産れ出でたのである。彼の維新の當時、どうして攘夷黨が敗けて開國主義者が勝利を占めたのであらうか。之れは頗る興味ある問題である。實は當初攘夷黨が勢力を有し、京都方は全然攘夷主義で、鎖國攘夷は勅命であり、國是であつた。否維新の大業其ものが尊王攘夷を大義名分として企てられたものである。然るに大勢の赴く所は如何ともする能はず、攘夷論は漸次其勢力を失墜し、遂に開國主義が勝利を博するに至つた。此時開國

主義を取ると取らざるとは之れ實に我國の興敗存亡の係る危機であつたのである。當時に於ける我國の歴史程後世人士の涙を絞らしむるものはない。見よ彼の時、我國は如何に多くの人物を殺したのであらうか。殆んど枚擧するに遑ない位である。彼の高野長英の如き眞に卓見ある人物であつたが、彼れが幽囚の身となつた原因は日本橋の上立つて「此水も亞米利加までも歐羅巴までも續いて居るのだ」と獨語したのにあつたと云ふ事である。彼は世界的見識があつたのであるが、遂に幽閉の身となり牢死したのである。其他、日本國民はよくも斯く頑迷なる行動をなし得たものであると思はれる位、當時の先覺たる偉人傑士を暗殺し、牢死せしめたのである。然るに不思議なことには、其苦しめられ殺されたもの、方が結局勝を制した。大勢に向ふ所は眞に恐ろしいものである。予は先年朝鮮に遊び、其山岳の濫伐のために禿頭となりたるを見て、何とも云はれぬ寂寥を感じたのであるが、夫れよりも更に悲哀を催ふしたるは、近代彼國に於て幾多の人材を殺したことであつた。朝鮮の近代史は實に殺戮の記録である。彼等は互に殺しつ殺されつ、人物と云ふ人物を全く非命の死に終らしめた。斯

く殺せば國も亡ぶより外はないのである。我國に於ても殺すには殺したが、幸にして殺し盡す迄には到らなかつた。そこで生き残つた人物は初めて茲に大勢の指導者となり、我國をして累卵の危機より救ふたのである。予は此間に大能の攝理を認めざるを得ない。

更に溯つて近古天主教が我國に傳來して來た時の事を少しく考へて見たい。此時彼の宗教は殆んど決河の勢を以てはいつて來た。而して夫れが國內に延蔓する有様は目醒しいものであつた。然るに此時の政府は大なる決心を以て之が撲滅に着手し、多大の犠牲と幾多の慘事にも眼をつぶつて、遂に之れを全滅してしまつた。余は三十年前此の事績を考へて此の措置は我國のため眞に幸福であつたと思つたのであるが、今日に至るまで此意見を覆すべき反證を發見したのである。彼の時代には歐羅巴に於ても之れに類似する戦争があつた。殊に獨逸の如き彼の三十年戦争を惹き起し、其他英國も佛國も大戦争をやつたのであるが、其目的は東西皆同一であつた。而して此時代羅馬教を歓迎し、之れを奉じた國民は今日皆衰退し、或は滅亡に向ひつゝあるのは何

人も否む能はざる公知の事實である。我國も當時の羅馬教をして勢力を恣にせしめたるならば、今日の國運を保持し得たかは疑問である。之れがために歐洲文明の輸入を杜絶したことは大なる不利益であつたが、予は夫れにも優る幸ひを贏ち得たと信するものである。

上古に於ける儒教、佛教傳來以後の状態を見ても、吾等は日本民族の中に一種の精神の活躍せるを見出さざるを得ない。儒教は興國の宗教ではない。支那のことは暫く論せず、儒教を採用して國民教育の根本要素となしたる朝鮮は如何と云ふに、李朝に於て儒教を採用して以來、朝鮮は國民を養はずして、却つて之れを害ふた事は史實の示す處である。朝鮮の衰頹は實に儒教の中毒と云ふも不當ではない。然るに同じく儒教を以て國民道德の作振を圖つた日本は如何、徳川時代に儒教を採用して以來其國民精神上に與へたる貢獻に眞に著しいものである。儒教に於て朝鮮は我の師である、大先生は之れを朝鮮に仰がざるを得なかつた。現に先帝の侍講たりし碩儒元田永孚は朝鮮の李退溪に負ふ所甚大であつて、肥後學の鼻祖は實に此の李退溪である。朝鮮に於

ては儒教が衰頹の因となり、日本にて勃興の一要素となつたことは興味ある題目ではなからうか。佛教の跡方を温ねても同様の結論に到着する。佛教の出生地たる印度は云はずもあれ、安南、暹羅、支那、朝鮮、苟も佛教を取つて以て我宗教とせし國に、一として新興の機運を示しつゝあるものはない。此點に於て日本は又之れと羈を一にしない。日本は疑ひなく佛教國である。然も佛教のために衰退しない。のみならず佛教も亦我國民の精神生活の上に多大の貢獻をなしたのである。茲に至つて日本國民は眞に不思議なる民族と云はざるを得ない。

以上は我民族精神の外來的要素に就て略述したのであるが、更に驚くべき事實は國民生活の内部に於ける狀況である。予は之れを點檢する時、よくも我國民は滅亡しなかつたと戦慄せざるを得ない。我民族の如何に速かに腐敗する事よ。小成に安じ永生不朽の抱負なき事よ。此の點に於て我國民は殆んど一顧の價值だもない。かの奈良平安朝の文學を見よ。源氏物語、伊勢物語など殆んど話にならぬ。其柔弱にして活氣なき状態は眞に憐れむにたへぬものがある。降つて世は豪放なる武門の手に歸したりと

は云へ、彼等も亦三代を出でずして墮落したのである。平家の末路を見よ、源氏の末路を見よ、北條足利織田豊臣の末路を見よ。殊に豊臣秀吉に至つては其腐敗の速かさ實に言語同斷である。更に降つて徳川時代は如何、彼の天下泰平を謳歌せる元祿時代の有様は現代畫家の憧憬する所なるが、年々「文展」に表はるゝ油を絞りあげられたやうな人間はあれが果して日本民族であるか、實に男も女も生氣と云ふものがなく、一見嘔吐を催さざるを得ないのである。此の腐敗の迅速なる日本民族がどうして今日あるを得たのであらうか。眞に不思議である。思ふに之れは恰かも彼イスラエルの民族が幾度か神意に背きて罪を重ねたるに拘らず、又他の一方に新らしき人々が輩出して民族の精神を繼紹し、夫れが腐敗すれば又他に勃興し來つたやうに、一面に於いては墮落のどん底に陥つてをるのに、他の一面に新興の氣を吐くものが起つたからであらう。即ち平氏都に軟化すれば源氏勃然として東國に覇を稱し、北條東に腐敗すれば、楠、新田西に北に皇國の大義を唱へたる如く、幸にも何處にか民族の良知良能が勃發し、之れに取つて代つたからであらう。茲は實に有難い處である。若し之れなくば我

國民は何等外國の壓迫なくとも、奈良平安朝の古に於て、或は又桃山時代元祿時代に於て自滅してしまつたかも知れない。予は此精神生活に於ける我國民の内憂外患を見て、其戦ひは悲惨なりしにもせよ、兎に角今日まで切り抜け來たりし事を思ひ、其間神の特別なる恩寵が我民族の上にありしことを信せずには居られないのである。

乍併予は之れを以て直に日本國民を神に選ばれたる民族であるとは斷言し得ない。予を以て現代日本國民を見れば實に一大悲觀に終らざるを得ない。現代日本の社會は何れの方面に眼を注ぐも吾人をして感動せしめ歡喜せしむるものはない。正に八方塞りである。維新當時の青年も一面に於ては腐敗して居つた。然し彼等には一種の元氣があつた。彼等は酒色に趨かないではなかつたが、彼等には夫れには囚へられぬ強烈なる精神があつた。報國の丹心即ち之れである。然るに今日の青年は直に耽溺して仕舞ふ囚はれて動けなくなる。其氣概なき事元祿時代と同様である。予は此點に於て其道德的缺陷は非難すべき點もあるが、其旺なる意氣は五十年前の青年を稱せざるを得ないのである。實業家を見れば更に甚だしきものがある。之れは聞けば聞く程其醜體

に驚く。或所は其廢類殆んど吾等には分らぬ位である。東京に於て藝娼妓は此處にあり、彼處にあると云ふではない。山手と云はず、下町と云はず、紳士紳商のをる處、殆んど全市に跋扈して居る。さうして此微菌は年々歳々増して行く。のみならず此病毒は都會の地のみの特有現象にあらずして、交通機關の發達とともに今や津々浦々に及び、國民を擧げて其病菌に襲はれつゝある、病膏盲に入るとは眞に斯の如き事を云ふべきであらう。之を見て心あるもの誰か悲觀せざらん。又昔の教育は不完全極まるものであつた。しかしそこには一種の美しき精神があつた。然るに現代教育家の心事には實に言語同斷の者があるのである。其の他何れの社會を見ても皆五十歩百歩である。吾人は之れを見て日本民族は神に選ばれたる民族なりと云ふ勇氣はない。

此怜むべき民族の中に何處より清く新しき精神が勃發し來るであらうか。そは極めて少數者である、その中に算すべきものは云ふまでもなく吾等クリスチャンの團體であつて現に新しき精神を發揮しつゝあるのである。吾等は神に召されたる者、多くの同胞の中より特に選ばれて神の民となつた處のものである。然り吾れ等は如何に小數

であるとも極東に於ける選民ではなからうか。吾等は茲に重大なる使命責任を自覺せねばならぬ。吾等の團體は誠に少數である。未だ以て時代を震撼するに足らざる事恰も初代基督教徒が羅馬帝國に於けると同様である。現代の識者にして吾等の理想、抱負を嘲笑するもの決して少くない。例令ば彼の矯風事業の如き、政治家も學者も教育家すらも吾人の主張を冷笑しつゝある。乍併吾等は國民の良能を以て任じ、斷じて之れに讓歩してはならないのである。吾等の中に、曾ては腐敗墮落の淵に沈潜しながら、一旦基督の人格に接するや、豁然として信仰に入り、全く生れ更つた生活を營みつつあるものがある、之れは即ち民族の多數がそこに往けると云ふことを證據立てる者ではなからうか。換言すれば一人の成し遂げたる事を他の人が出來ない筈はないこの活ける證者ではなからうか。又或者は純潔なる家庭に生長し青年に及んで教會生活をなし、眞に清節を完ふせる者もある。彼等は眞清純潔の理想は決して空論にあらずと信じ得る資格あるのみならず。現代の社會にも、他の我家庭の如き家庭を存在することを信じ、勇氣を以て其の如き家庭の建設に努力することを得るのである。又老人に

して日本古來の教育を受け、武士の精神に養はれ、日本人として凡てのよきものを體得せるものが、更に洗禮をうけてクリスチャンとなつた者もあらう。之れ實に日本固有の精神を復活せしめたるものであつて、決して之れを捨て、彼を取つたのでなく、武士の高潔なる精神に洗禮を施したるものである。斯る人は實に日本民族の精華であつて、武士道の精神は基督教によつて其本來の面目を發揮せしむるものなるを證明しつゝある人である。我が國には此の種の疑問のために基督教の特長を是認しながら、猶ほ且つ是れに入るを躊躇しつゝあるものが少くない。彼等の蒙を啓きて、基督教は之れを廢つるにあらず、實にそれを成就するものなることを闡明するは、此の種の人々の職分ではなからうか。其他吾等各自の證明すべき實驗は一にして足らないのであるが、之れを要するに吾等は日本民族の良智良能となり、民族の指導者となり、中堅となり、以て國民を今日の危険なる状態より匡濟せねばならぬ、之れ吾人クリスチャンの双肩にかゝれる天職である。

更に一の重大なる使命が、吾人の上に加へられてをる。それは日本國民をして世界

的精神を獲得せしむる事である。之れ現代日本のクリスチャンの最も重んずべき職分である。今や我國は最もよき境遇に置かれてある。人は善惡の友によるといふ。若しも國家が善惡の友によるならば、我國はご幸なる國家はない、英米が我が親善の友邦にして、露佛も又さうである。獨逸も今日こそ敵であるが、平和克復の曉は同じく之れ友邦である。日本國民にして眞に其精神を展開して、一躍彼等と共に世界人類の經營に參するの決心あらば、我國の前途は實に洋々たるものであらう。然るに悲しいかな、國民中には此の見易き道理に盲目にして、唯我獨尊的思想に囚はれ、國家主義、軍國主義を唯一の理想と考へ、獨逸從來の主義政策に模倣せんとするものがある。斯くては我國は斷じて世界に發展する事は出來ない。此の迷夢を啓き世界的萬國的民族たらしむるは吾等クリスチャンの責任である。吾等は斷じて一身の安心立命一家の和平幸福を以て安んじては成らない。國家の運命を双肩に擔ふの覺悟を要する。亞米利加合衆國のクリスチャンは世界を双肩に擔つて立つてをる。吾等も正に此抱負がなければならぬのであるが、先づ日本民族を向上せしめ聖化せしむる事を吾等の天職とせ

ねばならぬ。今回の大戦亂を以て對岸の火災となすものあるか、迂愚も亦甚し。今回の大戦亂は我國にとりて日清戰爭以上の重大事である。若しも此際我國民が世界的萬國的精神の中に覺醒せず、依然として舊來の固陋偏狹なる愛國主義、民族主義の中に蟄居せんか、我國の運命や知るべきのみ。國民をして此迷夢より呼び覺さんとするクリスチャンの事業はと偉大なるはなからう。クリスチャンは益々その堅固なる選民の信念を深うして、之を日本國民の信念となさねばならぬ。神の選民たる日本國民の自信力はやがてその腐敗より免れしめ、その弱點を矯正し、公明正大なる大望を懷いて世界に雄飛する時あるを信ずる。クリスチャンの國民に對する責任も亦大なる哉。

選民の宗教

獨逸の有名なる神學者ツレリツチは「プロテスタント教は獨逸民族と其存在を同じふす、此の獨逸民族あらん限りプロテスタント教も存すべし、獨逸民族の滅亡する日

あらば、それは新教滅亡の日ならん」と云つてをるが、之れは獨逸民族の意氣精神を窺知するに足るべき言である。吾等は英國人より斯く明かなる斷言を聞く機會を持たないのであるが、若しも英國を代表する所の神學者をして云はしむれば、必ず同様な言葉をアングロサクソンの上に用ゆるのであらうと思ふ。一體宗教は人間の性格と其の働きの發表と云つてよい。故に宗教は人類をはなれて存在するものではない、民族なしに宗教はないのである。ちよつと考へると宗教は民族を離れて存在し得るやうに見える。聖書の上に宗教があると云ふが如きは即ちそれであつて、一見如何にも道理に應つた様であるがさうでない。舊約聖書は實にイスラエル民族の精神状態を書いたものであつて、新約聖書は第一世紀の羅馬帝國に於ける選ばれたる民族の内的生活を記せるものである。換言すれば當時に於ける彼等民族の聲其ものが聖書に表はれたる宗教であつて、民族をはなれて宗教はないのである。

然るに民族は生長し、進化し發展するものであつて、幼稚なる時代の精神状態を後にして前に前にと進んで行く。故に幼稚なる儘にして毫も人類の進歩と伴はざる場合

には其の宗教は不知不識を取り残されて、遂には過去の世界に其姿を止むるに至り、現在もなく將來もなき歴史的遺物となり了るのである。而して夫れは其民族が精神的に一大飛躍をなし幼穉なる精神状態に満足する能はざる時に最も明白に表はれ來たり、そこに舊宗教は廢り新宗教が出現するのである。然るに時あつてか其民族の中に一人の優れた人物が表はれて驚くべき宗教天才を發揮するも、大多数の民衆は之れを解せず、依然舊宗教の城廓に立て籠もりて、新しき精神の發表を豺狼の如く嫌厭するに至ることがある。斯る場合に其新宗教は其民族の有とならずして滅亡するか、然らずんば他の民族に向つて流出する。而して其民族が之れを了解し之れを受納する時、茲に初めて其面目を發揮し來るのである。歐羅巴の基督教はよくも彼等民族の精神を代表してをる。勿論北方の基督教と南方の基督教とは違つてをる。而してそは單に形式に相違あるのみならず、其内容に於ても同一ではないが、然も其の國民の精神生活の中樞、理想の表徴たる點に至つては同一である。試みに見よ南方の諸國に於ては基督の像を尊び、國民は彼を人間最高理想の顯現として崇拜してをるのであるが、之れは

北方に於ても同様である。然るに面白い事には其基督の像が寔によく其各國の國民性に適應して居るのである。例へば獨逸に於てルーテル、メランクトン等の像に對する獨逸人の感想は、之れ實に吾等の代表者吾等の理想の人物なりと云ふのである。然るに基督の像に對して彼等は如何に感ずるであらうか。彼等は基督の像に對しても之れは獨逸のもの獨逸人の理想の表徴、獨逸民族の目的なりと斷言して憚らないのである。之れは英國に於ても亦同様であつて、彼等はウエーリントン、グラッドストーン、其他英國が産みたる偉人傑士の像に面する時、之れ英國人の理想の顯現、アングロサクソン魂の權化として絶大の尊敬を拂ふのである。然るに彼等と並べる基督の像を見る時、之れを異邦人旅人、外より來れるものとしなない。同じく之れ英國人として、英國人の中にある偉人、英國人の理想の表現なりとして無限の敬意を表するのである。之れに由つて之れを見るも、督教は決して外より來つたものではなく、歐米人の精神中に勃發したるものなることが分る。又ラファエルの基督は今日世界の等しく讚歎して措かざる所である。彼の基督は多くは小兒のイエスである。聖母に懷かれたる基督、

誕生の基督等、實に可愛い、やさしい嬰兒である。決して厳格な威儀堂々たる剛健の基督ではない。之れに反し北方の基督は元氣潑潑たる獨立獨行の偉丈夫である。南方の基督にも可愛い優しい中に一種の威嚴がないではないが、しかし南方畫家によつて描かれたる基督は、情ぶかい、涙もろい美しい小兒の耶穌である。之れ等を見ても如何に其國民の精神が美術を通じ、文學を通して表はるゝものなるか分る。又基督傳は獨逸に於て非常に多く書かれた。殊に十八世紀の末より十九世紀の初頭に至る迄の四五十年間に於ける獨逸學者の基督傳の發表は寔に著しいものであつた。彼のシユツイテエルが、「ライマルスよりウレーデまで」と題する諸基督傳評論の中に「近世の基督傳に描かれたる基督は皆之れ獨逸の基督を書いたものである。故に獨逸人が之れをよめば、基督は彼等の衷なる人の模範であり、理想であり、指導者であり、救主であることを感せしめる」と云つてをる。然り獨逸人の書きたる基督傳は確かにジャーマン、クライストである。其の如く英國にて書かれたる多くの基督傳は、英國人にとりて彼等の模範であり、理想であり、指導者であり、救主である。彼等は之れを讀んでシユ

ワイテエルの如く、アングロサクソン、クライストなりと云ふに躊躇しないであらう。

斯くの如く其宗教によつて、國民精神の状態を知る事が出来る。乍併之れによつて其の國民が選ばれたる民であるか否かの問題は俄かに之れを判断することは出来ない。昔より特色ある國民は我こそは天の選民なりとの自覺を持つた。しかし自覺丈けでは選民であると云ふことは出来ない。自覺には間違がある。又自覺のみにては決行力の乏しい事がある。而して選民の自覺を有するも、其自覺の誤謬決行力の缺乏のため自から選民たる能はざるものがある。彼の希臘民族の如きは自からも選ばれたる民なりと信じ、他も亦之れを許したる程の天才的民族であつた。彼等希臘民族の黄金時代は眞に燦爛たるものであつた。乍併彼等は遂に永く此の燦爛たる光榮を享樂することは出来なかつたのである。當時の希臘宗教は眞に美はしき、快活なる、氣持のよい、自然を楽しみ、人生を喜ぶ、美の宗教であつて、何人も其の前には恍惚たらざるを得ざるものがあつた。それは今日に残れる彼の文學、美術、神話等に依つて之れ

を察知する事が出来る。乍併彼等の宗教思想は真に幼稚なるものであつた。故に彼等希臘民族が世界に發展せんとするに際しては、勢ひ種々の困難に遭遇せざるを得なかつた。彼等は段々と世界的に發展し、世界的智見を廣めて來た。茲に於てか淺薄幼稚なる美の宗教は之れに伴ふて發展することは出来なかつた。そこで彼等の進歩したる智識は其の美しくして然も幼稚なる彼女に批判を加へ、遂に之れを破壊し滅亡せしむるに至つたのである、ソクラテースは即ち其審判者である、或學者が「彼は哲學者にあらず、宗教家なり」と云つたのは至言と云はねばならぬ。何となれば彼は哲理を講究して他を省みざる一學究にあらずして、希臘民族の指導者として、民族精神の根本的病弊を看破し、彼等に向つて世界的基礎の上に立てる萬民共通の真理を宣傳せんとしたからである。然るに不幸にも彼は餘りに早く此の世に生れ、其の所説は希臘民族の了解する處とならず、遂に毒殺せらるゝに至つた。ソクラテースを殺したのは、將さに産聲を擧げんとする、當來の宗教を勦滅したるものである。故に希臘民族は自己の指導者たり、先覺者たるべき人物を殺し、自から其の天才民族たり、天の選民たる

の資格を抛棄したるもの、斯くては倒れざらんとするも得ないのである。果せる哉ソクラテースの死は希臘民族の没落を早めた。今日希臘王國なるものあれど、之れを往昔の彼等に比すれば、其精神的內容に於て同日に論すべきものではない。故に單に天才的民族なりとの故を以て、天の選民なりと云ふことは出来ないのである。

又彼の猶太民族の如き真に立派なる宗教を以て起つて來た。彼等が神は清く正しく一點の曇りなきものなりとした神觀は、實に一大卓見と云はねばならぬ。彼等は此絶大なる宗教思想に立つて、「吾等猶太民族は萬國民の中より特に神に選ばれたるものなり」と信じ、此自覺に立つて、世界の人類が猶太民族の前に跪拜するの目あるを信じ、吾等人間社會は罪と穢れとに満ちてをる、のみならず森羅萬象は矛盾と衝突とを以て終始してをる、此宇宙と人生との中に唯だ天地の神のみが清く正しくして、一點の穢れなきものなりと見るは、實に彼等の深奥なる信仰の然らしむる所であつて、彼等は此一點より見る時は、確かに選民たるの資格を享有した所のものである。乍併猶太人の神觀にはそこに一大缺陷が潜んでをつた。夫れは即ち「神は我々選民たる猶太

民族のみの神にして世界人類の神でない、唯だ吾等にのみ幸福を降し、吾等にのみ恩恵を與ふるものである」とする事である。之れは自國民を以て天の選民と見る民族に共通なる觀念であつて、斯る考へを以て起ちたる國民は決して少くないのであるが、是れを以て眞に神の選民たることは出来ないのである。此時イエス・キリスト世に現はれ給ふて、その清くして正しく穢れなき神は一國一民族の占有すべきものにあらすして、世界人類の神、萬有の支配者なることを宣言し給ふた。之れ實に猶本人に取りては青天の霹靂にして、甚だしく彼等の自負心を害ふたのである。故に彼等は基督を以て許すべからざる大不敬漢となし、遂に神と國家との名によりて彼を十字架の上に殺したのである。此の基督の心に映じたる神は、實に神を人類の父とし、人類を同胞とする萬人未到の一大實驗であつて、之れこそ眞實なる選民の宗教であるが、頑迷なる猶太民族は之れを受け納るゝの明かなる良心なく、自から選民たるの深甚なる要求を抱懐しながら、其選民の要素たるべき主張を異端邪説として湮滅せんとしたのである。されば彼等も亦希臘人がソクラテースを殺して滅亡への第一歩を踏み出したやうに、

基督を磔殺すると同時に、非運は國家を襲ひ、遂に基督の死後四十年にして猶太民族は滅亡の運命に際會したのである。彼等は爾來奴隸の如き境遇に甘じて他國の壓迫の下に塗炭の苦しみを嘗め、或は故國を放れて放浪の生活に入つてをるのである。しかも彼等が一千九百年の今日まで祖先の唱破せし選民の信仰を捨てず、最近に至つてもその世界的面目を開き始めたる點は注目すべき所である。

近世に於て選民の自覺を以て起てる民族は獨逸民族である。獨逸民族は「我等は世界に於て特に神に選ばれたるものである」と信じ、學者政治家、宗教家が異口同音に之れを高調した。此主張には一面貴重なる眞理があるがしかも一面に大なる誤謬が存するのである。獨逸に於て勃興したプロテスタント教は、彼等獨逸人に向つて甚大なる自負心と強烈なる自覺とを與へた。獨逸帝國をして今日あらしめたるものは即ち此プロテスタント教の精神に燃されたる獨逸魂であつて、獨逸近世の史家トライチエツケの如きは、殊にこの選民たる資格を高調したのである。我國民は獨逸の勃興、獨逸の隆盛を以て唯だ單に學問技藝の進歩にのみ原因するものとなし、毫も其根本に溯ら

ないのであるが、之れ眞に皮相の見解である、此の獨逸精神の代表者はマーチン・ルーテルとイマヌエル・カントである。ルーテルは深奥なる宗教的情操を發揮しカントは其明晰なる研究を以て基督教の倫理を闡明した。此二人は宗教と倫理との代表的人物として基督夫れ自身の宗教と倫理とを遺憾なく云ひ表はしたるものである。チュウトン民族の使命を高調したるチュエンパーレンは「基督以前に基督の宗教を云ひ表はしたるものなく基督以後に於てルーテル初めて基督の宗教の眞髓を發揮し、カント初めて彼の宗教の倫理的註釋を下した。基督こそはチュートン人中のチュートン人なり」と云つたが、奇矯の言なれども、亦深く味ふべきものである。ルーテルの神は、絶対に清く且善なる眞の神であり、其純全なる正義の神に信頼するは之れ即ちルーテルの信仰であつた。絶対の眞善なる神に一切を任せて、其間毫も自己の意志を挟まさない。自己の意志を用ひるは即ち罪なりとは彼の主張であつた。斯く神に絶対の信頼を繋ぐる時は、神は深く之れを嘉し給ひ、吾等が其全心全靈を捧げたる代りに神自身が吾等の中に生き給ふ神人合一の妙境とは即ち之れである。吾等は斯くして神の子となるのである。

ある。人間は動もすれば神を信じながら、一方に自己を立て、神の意志と自己の意志とを平等に須ひんとする。夫れは信頼と云ふことは出来ぬ。吾等は斷じて自己を立ててはならぬ。毫頭にて自己を立てるは即ち罪である。世の義しきにあらず世の清きにあらず、神の義神の清である。此信仰によらざれば人は救はれない。此信仰の根底に堅く立ちて全身全力を盡す人が初めて神と共に活くるのである。「信仰によれる義人は生くとは即ち之れである。之れは最も靈的の宗教であつて、教義にあらず、信條にあらず又神學にあらず、自己の意志が撰揮したる第一義的生活である。故にそこには威武も屈する能はず、富貴も淫する能はざる確固不動の偉力がある。ルーテルは茲に「我」の根底を見出した。彼が當時天下を睥睨して歐洲の諸侯を其の闕下に跪かしめつゝある羅馬法皇の威儀を侵して、正々堂々自己の所信を發表し遂に宗教改革の偉業を大成せしは、實に此信仰の力に基くものである。

大哲カントはルーテルの實驗せしところを倫理的方面より見てその深遠なる學説を發表した。清く正しく偽なき意志ほど尊いものはない。その意志が絶対的至善の法則

に従ふことが、之れ實に倫理の極致であるとはカントの主張である。之れはルーテルの己を虚して神に仕ふる信仰と同一物の異なる見方であつて、究極同意義である。故に基督教の極意は、以上述べたるルーテルとカントに於いて盡きてをると云ふも過言でない。此兩者の強烈なる意氣精神は流れ／＼て獨逸民族の心田を潤はした。之れ即ち獨逸に勃興したプロテスタント教である。獨逸人は此の偉大なる思想に培はれて眞に偉大なる民族となつた。此點は實に偉なりとせざるを得ない。多くの日本人は其科學の發達、器械の發明、軍器兵力の強大、藥品、染料の多産等を稱揚して、獨逸の偉大に驚くのであるが、斯の如きは抑も末であつて、之れ等の根底は深く且大なる精神生命が活躍してをるのである。それを見ずして其枝葉の壯觀に眩惑し、之れを模倣せんとするは狝猴の衣冠に等しき憐むべきものである。獨逸國民は此ルーテルによりて高調せられ、カントによりて絶叫せられたる生命の炬火を我物としてをる。彼等が「我こそは神の選民なり」と確信し、選民的使命を完成せんと自任しつゝ、ある態度は吾人の推稱に値するものである。乍併之れは獨り獨逸民族のみに就て見らるゝ現象ではな

い。大英國民の中にも亦明かに之れを見るのである。否な此の精神は寧ろアングロサクソン民族の間より勃發して來た。彼のウイクトップの如きは宗教改革の曙の明星と云ふべき人であつて、ルーテルに先つこと正さに一百年、夙に英國にありて此の天地の神に對する絶對の信頼を高調し、神と人との間に介在する教義信條を打破せんと努めた。彼の感化をうけて宗教改革の魁をなし、時の政府と法皇の教權とに壓迫せられ、遂に火刑に處せられたのはボヘミヤのハスである。彼も亦熱烈なる信仰を以て眠れる國民の前に警鐘を亂打した。斯くの如く、此の絶對純全の神に對する忠誠は決して獨逸民族のみの特有物にあらずして、實にアングロサクソンにも、又其他の歐洲民族の中にも深き根底を有してをるのである。勿論今日獨逸は大に其方針を誤つてをる。之れ獨逸民族が悪いのではない。其指導者たる識者、達者が其政策を誤つたのである。切言すれば彼等は猶太民族の神觀に陥り、神は獨逸帝國をのみ擁護し給ひ、獨逸民族にのみ選民の光榮を與へ給ふと信じて、不知不識其精神は惰落して、勢力主義に訴へて民族的發展を圖らんとし、遂に今日の如き運命に遭遇したのである。彼等があれ程

までに立派なる精神を享有しながら、一步方向を誤つて神命を恥かしめしは、返す返すも遺憾なること、云はねばならぬ。

翻つて思ふ。日本民族の精神を代表するものは果して何であるか。何が我民族の根底であるか、之れが日本人の代表的宗教なりと云ひ得る宗教は何であらうか、我國には實に種々様々の宗教がある。しかし之れが我民族の精神的發表であると云ひ得る宗教があるであらうか。吾等には最も深く日本民族の精神界に根底を下ろし、之れこそ我國民の代表的精神の發表であると云ふに足るものが見えない。佛教は千有餘年の根底を有す、斯教にとりて我國は第二の故郷であらう。乍併佛教は果して我が民族精神の代表的發表であらうか。我等は彼奈良鎌倉等の大佛を見る時、英米人が基督の像に於けるが如く、之れ我國民の理想の表徴なりと云ひ得るかと云ふにさうでない。我等にとりて彼の釋迦の像は何處までも印度人にして、日本人ではない。之れを寺院に就て見るも、彼の淨土眞宗の如きは他宗に比して大に日本化したものと云はれて居るが、しかも彼の金色燦爛たる佛具佛像、其こてくくと飾り立てたる裝飾、其暗暝の闇

に於ける讀經、之れを以て日本人にふさわしき精神的現象と云ふことは出来ない。其點より云へば神道は何んと云つても最も吾等に共鳴するものがあるやうである。彼の伊勢大廟に詣づるもの、その森々としてすがくしき自然、其の瀟洒として飾りげなき白木作りの聖殿、其質素にして然も莊嚴なる風光は、之れ實に我國民の思想、精神趣味、好尚を遺憾なく表はしてゐるものと思はれるのである。

然らば吾等は伊勢大廟を以て吾等の精神的發表なりとして満足すべきであらうか。否々、伊勢大廟は之れ一個の歴史的聖地であつて、大廟を以て我民族の精神的發表の全部であると云ふことは出来ない。宗教は過去に求むべきものでない現在及將來に求むべきものである。聖地や靈場に求むべきものでない。實に人類生活の眞唯中に求むべきものである。果して然らば我日本人中には彼のグラッドストーンの如くリンコルンの如く、其他歐米の政治家、文學者、教育家、實業家の如く眞に宗教を生活した人があるか。信仰を其生活の中に織り込んでゐる人があるか。伊藤、山縣、大隈、其他第一流の人物は、政治家としては立派な人であらう。乍然宗教倫理の模表として、日

本人の最も深く尊いものを體得せる人格として見る時は到底不十分なるを免れない。一個の民族として存在する以上そこに何等かの精神的發表を有する筈である。夫がなければ民族として眞に不幸なるものであると思ふ。吾等が基督教を信する所以は此一面を啓かんがためである。世人は吾人の活動を目して歐米の基督教を廣めるのであると云ふ愚も亦甚しきかな。他國の基督教を廣めることが出来るものでない。何となれば宗教は外より注入さるゝものにあらずして、内より喚發さるゝものであるからである。吾等の中なる良心は單なる出來心ではない、不可議なる習慣によつて養成せられたものでもない。之れ實に天地の奥底に根ざすもの、天地を支配する權能の一部である。吾等の道義性は吾等の良心が此の尊ぶべき絶對善を望み見て、其純善なるが如くならんとする努力其ものである。我等は此信仰をやめる事は出來ない。如何なる王侯貴人と雖も吾等より之れを奪ふことは出來ないのである。若し之れを奪はんとすれば夫れは吾等の肉體的存在を滅ぼすより外はない。然も猶ほ其良心の生命を奪ふことは出來ないのである、之れ吾等の良心は、天地の神の「わけ魂」であるからである。吾

等の靈は天地の大本なる絶對善を慕ひ、絶對善に體がれ、其の清く正しきが如く成らんと、晝夜を分たず慕ひ喘ひてをる。古の詩人が「鹿の谿水を慕ひ喘ぐが如く我靈魂は汝を慕ふ」とは即ち這間の消息を謠へるものである。此信仰は斷じて外より添加するものにあらず、内より覺醒するものである。

此靈的覺醒は日本人の中に起らざるべからざる所のものであるが、容易に起つて來ない。吾等クリスチャンは之れがために身命を大和民族に投げ出して居るものである。之れクリスチャンが功名榮達の外に超然として國民の靈覺のために奮闘する所以である。此深く清き天地の根柢に立つにあらざれば、何れの國民と雖も今後の世界にたつてその進運に貢献することは出來ない。此根據にたつ時肉體にては異民族異人種なれど、道義的には人類は同胞なりとの觀念に入るのである。理性の上に於ては異人種をも我が隣りの如く愛好することが出来るのである。此道義的理性的信仰を我國多數のクリスチャンが獲得したることは、やがて日本國民全體が之れに入り得るの可能性を有する證據である。此信仰が大和民族の信仰となるにあらざれば、我國民は斷じて

天の選民たることは出来ない。此信仰によらずして我國民は世界に於ける特別なる民族とし、天祐は唯だ日本國民のみにあると思ふならば、般鑑遠からず獨逸の現状はそのよき見せしめである。獨逸民族が特に世界に卓越したる宗教的信仰を有せしは前述の如くである。然るに彼等は其の主義信仰を悪用し、其兵備富力に充實して遂に侵略主義を其國是とし以つて今日の非運を招いたのは惜しむべき事であつた。「劔を取るものは劔にて倒る」とは基督の聖訓である。獨逸は軍備を張つて軍備にて倒れつゝあるのである。古語に天に順ふものは存し、天に逆ふものは亡ぶとある。是即ち道義的信仰、切言すれば天地を主宰する唯一絶對の神に順ふものは榮へ、之れに逆ふものゝ遂に亡ぶべきを云へるものである。天地の神の意志に従ひ、毫も自己を用ひず、天地の公道、神の正義、我が良心に立つて行動するもの何故に滅亡すべきぞ。若し獨逸にして此信念に立ち正義人道の旗を押し立て、世界に打つて出でなば天下何者か之れを遮らん。惜しい哉、彼は根本を忘れて枝葉に走り、神の權能にあらずして、國家の權能に立つたために今日八方に敵を有するに至つたのである。

我國民は民族としては今日相當に世界に發展してをるが、若し其精神的方面に於て依然として舊日本の鎖國的、國民的宗教に支配せられ、世界人類を同胞兄弟とするの世界的宗教に飛躍することなくんば、日本帝國の前途は決して樂觀することは出来ない。之れに反し國民が此道義的良心の宗教に立ち世界を我が家とし全人類を我兄弟とするの一大覺醒をなさば、歐米國民と比肩して相譲らざるのみならず、東洋を代表して歐米の社會に一大權威を有するに至るは明かである。斯る宗教は即ち選民の宗教であつて、此宗教を我有とし、天地の神の指導に我進退を托すること實に神の選民である。

靜的宗教と動的宗教終

大正七年十一月十五日印刷
大正七年十二月八日發行

靜的宗教之動的宗教
定價壹圓九拾錢



著者 海老名 彈正
發行者 株式會社 大 鐙 閣
東京市京橋區桶町十五番地
右代表者 取締役社長
印刷人 久世 勇三
東京市麴町區有樂町二丁目一番地
印刷所 吉原 良三
東京市麴町區有樂町二丁目一番地
報文社

發行所
東京市京橋區桶町十五番地
大阪市南區三休橋南詰
株式會社 大 鐙 閣
總發 東京三三六一八番
大阪二七一五五番

加藤咄堂新著

脩養百話

全一冊
四六判クロース本綴
函入装幀高尙
定價壹圓五拾錢
郵稅內地八錢
滿鮮廿四錢

俗談平調能く人間處世の根本義を誨ゆ。苦樂の轉換、貧富の超越、精進力行と安心立命、其脩養方法は悉く收めて此一巻にあり。眞に維れ明治の鳩翁道話、宜しく想ひを潛めて讀む可し。



目次大要

| | | | |
|---------|------------|-------------|--------------|
| 自覺 | 世界的自覺外二項 | 浮世の旅 | 浮世は旅外四項 |
| 修養訓 | 生死の關係外廿項 | 以和爲貴 | 治國富家の根本義外三項 |
| 精神上の自活 | 唯我獨尊外四項 | 智識と信仰 | 學問と宗教の相違點外五項 |
| 自彊不息 | 成功不成功外二項 | 他力の安心 | 他力宗の意義外三項 |
| 宗教と修養 | 五重の關係外十一項 | 實際的修養 | 人間の道外四項 |
| 人格論 | 人格と自我外八項 | 現實生活と解脱の趣味 | 人心の二面外六項 |
| 戊申詔書の眼目 | 日本の文明外四項 | 人生と修養 | 人生問題外四項 |
| 虎と獅子と狐 | 人生は苦か樂か外八項 | 文學上より見たる維摩經 | 五項 |
| 樂しき生活 | 人生は苦か樂か外八項 | | |
| 犬と人間 | 犬の傳説外二項 | | |

大 會 社 行 發 閣 鏡 大

大内青巒序 松岡良友著

日本の宗教及其現勢

四六判正送
紙價壹圓
三拾貳圓
總本餘拾錢
六數圓八錢
判本餘拾錢
布餘拾錢
總本餘拾錢
判本餘拾錢

最近日本宗教界の至便にして正確なる鳥瞰圖、徒爾なる机上の空論にあらずして、悉く維れ現實資料の提供也。卷末には現行宗教法令の附録あり、特に宗教家の座右に缺くべからざる必須の書。

要 大 次 目

| | | | | | |
|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 日本佛教各宗現勢一斑 | △各宗名稱△各宗勢力比較分布 | 神道各教派の現勢一斑 | △神社△全國神社及神職數一覽 | 日本基督教各派の現勢 | △基督教の現勢△希臘教羅馬加 |
| 地總覽△各宗本山門跡管長事務 | 所一覽△各宗總本山大本山本山 | △神道各派の教勢△各派教會△ | 各派經營學校△各派管長及事務 | 持力教△日本基督教會△日本聖 | 公會△日本メソヂスト教會△日 |
| 所在地一覽△現代佛教各宗立教 | 開宗の要義△天台△眞言△念佛 | 所々在地一覽△各派勢力比較△ | 神道各派教授の要旨△金光教△ | 本組合教會△自由メソヂスト教 | 會△浸禮教會△救世軍△普及福 |
| △淨土△眞宗△禪宗△日蓮△時 | 宗△華嚴△律宗等△各宗派經營 | 黑住教△天理教△御嶽教△禪教 | △神習教△大社教△扶桑教等 | 音教會△福音教會△統一教會△ | 同胞教會△各派勢力分布地△各 |
| 學校一覽△各宗海外布教等 | | | | 派協同事業及團體一覽 | |

大内青巒序 井上秀天著

▲支那禪宗地圖 ▲禪宗源流表
▲禪宗年表附錄 ▲新編總クロス美本

現代 碧巖錄詳解

定價貳圓五拾錢
紙數一千百十四頁
送料 內地十二錢
滿鮮三十錢

可驚大膽の快

著禪宗神祕の

解剖公案の現

代化人間處世

の妙典

著者は是新進有数の學徒曾て印度緬甸暹羅支那を巡遊し東洋文明の探究に没頭すること多年、此の深き造詣と拔山の自信と精察研鑽の大抱負を傾盡して茲に尤大八千枚の稿成る。舉例引證古今東西に涉り痒きに手の届かざるなく、諸ゆる類書先人の解釋を超越す。正に之れ東洋思想のエッセンス、世界の謎たる禪味の奥祕赤裸々として示現さるゝを見るべし。

株式會社 大鏡閣發行

高橋五郎著

鍋井克之畫伯裝釘

大鏡閣刊

人生哲學茶話

カンワアス布製裝釘極美
紙數約四百頁
定價壹圓參拾錢
送料 內地八錢
滿鮮廿四錢

本書は著者が古今東西に網羅せる該博の智識と圓熟の觀察とを以て人生問題を多方面に縱横講究し論評せるものにして、一々好題目を捉へ來つて興味津津たる靈筆を揮へる所眞に快刀亂麻を斷つ趣あり。應用實踐哲學として亦た玲瓏たるテーパー、トピックとして澆世の後進を指導すべく悉く有用の活文字を以て充さる。人生問題、生活問題、社會問題等に思を潜むるの士にして一度本書を繙かんかの的心琴に觸るゝ所あらん。

中外英字批評 著者自序に云く「本書は題號の示す如く人生哲學茶話であるが、悪く言へば、茶話であるかも知れない。兎に角一種のテーパー、トピックである」と之を一種の茶話であるかも知れない。人生に關する種々様々の問題百五十五を捉へ、一種奇警なる觀察を極大の筆にて叙するに流石博學なる著者の事なれば和漢洋の書籍より博引旁抄し、殊に佛典の句を多く引用せる如き、其處世の妙論と世俗的智恵 (Worldly wisdom) を教ゆるに有効なること彼のマーコンのエッセイズにも比すべく、其引用の該博なるは Lond Avebury の The Use of Life や其他の著書に似て居る。其文章には一言隻句も冗贅なく、誠に簡潔にして含蓄多く、句調が何處もなくマーコンの文章に似て居る云々

大阪府衛生課長 上村行彰著 河小博士 佐多學博士 山室軍 大佐序

公娼 賣られゆく女

四六版總クローリス
價壹圓四拾錢
送料内地八錢
滿鮮廿四錢

河小博士の文序一節

責任ある當局者並に科學者として權威ある老兄に於て 卒先此著發表の英斷に出でられしを感謝す

吁賣られ行く女！日進文化の今日、尙ほ此種の悲惨なる事實を眼前にせざるべからざる同胞は禍なる哉。多年警察部衛生課長の職にあり親ら此等慘鼻の實狀に接觸して萬斛同情の涙を禁する能はず、五千有餘の娼婦に就きて、一々其生國、前身、疾病、教育程度を始めとし、彼等處女時代の身分境遇淪落の動機原因經過等を備さに討れ、最も精確なる數字統計に依り科學的研究の歩武を進め、世の有識階級に對して社會乃至風教問題の大々的資料を提示せるものを本書とす。若し夫れ卷末の實例數十篇の如きは、總てこれ彼等賣春婦の直話を材としたるものにして、其哀切なる運命の経緯は、眞に大小説家の名作にも優り、人生の暗黒面に於ける赤裸々にして又眞實なる告白は、徐に讀者の心膈を寒からしむるものあるを知るべし。

株式會社 大燈閣發行

關露香著 岡本一平畫 四六版總クローリス 鋼井克之裝釘 裝釘斬新函入

人生の迷路に立ちて

定價圓貳拾錢
送料内地八錢
滿鮮廿錢

右せんか左せんか 人生此岐路に泣く

見よ今や時代の總ては悉く迷路に立てり宗教界は言はずもがな政治經濟亦何の權威ぞ況んや一般思想界の現狀をや此時誰か果して克く人生の迷路に立たずと言ひ得るものぞ特に現代青年の煩悶懊惱を如何にすべきか之れ誠に刻下の重大案件なり著者亦人生の岐路に泣くの人、自ら血涙を絞り本書に題して曰く、右行か左行か此書實に人生迷路の標榜也と

大燈閣名著文庫 第一編

- 目次一斑
- 世の中の垢で生きて居る金魚
 - 花は宇宙の象形文字
 - 燒餅
 - 女房鎮舞の踊
 - 六阿彌陀嫁の噂の棄て處
 - 人生は葡萄酒である
 - 人生はx×x×x
 - 人生は葡萄酒で
 - 女の研究
 - 結婚は宇宙の謎
 - 機會は禿頭だ
 - 女の研究
 - ラツキヨ生活
 - 人間教

東京大橋區橋本三丁目 大燈閣發行 東京大橋區橋本三丁目 大燈閣發行

325
331

12. 2. 26

終

